

＝「C作戦」20年目にあたり、日顕の完全敗北を宣言する＝

日顕書写の本尊は消え失せ、日寛上人書写の本尊が世界に流布。これこそ、日顕の完全敗北の実証である。

平成22年10月2日  
青年僧侶改革同盟一同

## ＝「C作戦」20年目にあたり、日頭の完全敗北を宣言する＝

日頭書写の本尊は消え失せ、日寛上人書写の御本尊が世界に流布。これこそ、日頭の完全敗北の実証である。

はじめに

一、「C作戦」は日頭の昔からの考え

- 日頭が名付けた「C作戦」
- 末寺住職の時から、寺院中心の体制を考えていた日頭
- 檀徒作りをして、戸田会長に叱責された日頭
- 先師に面従腹背していた日頭

2 1

二、登座した時から「檀家制度」の復活を目論んでいた日頭

- 「祖道の恢復」とは「檀家制度」の復活
- 現宗門の実態は「檀家制度」そのもの
- 創価学会の法人取得に反対していた日頭
- 「二十万人がつけばよい」の「二十万」は僧侶が生活するために必要な信徒の数

4

三、創価学会を賛嘆しながら、裏で学会攻撃を謀議していた日頭の二面性

- 「河辺メモ」が明かす二回の秘密会議
- 「御前会議」で日頭が「C作戦」と命名
- 〃僧侶の遊興問題に対処しないと作戦は失敗する〃と河辺が慎重論を唱える
- 「C作戦」実行のために徹底された、偽りの「綱紀自粛」
- 「綱紀自粛」を発表した当日、一人十五万円の高級温泉旅館に泊まった日頭夫妻
- 遊興に溺れることを恥と思わない日頭ファミリー
- 早瀬ファミリーも阿部ファミリーと同じ
- 「C作戦」を謀議しながら、開創七百年慶讃大法要で学会を賛嘆していた日頭
- 「C作戦」実行直前にも池田名誉会長を賛嘆する原稿を書いていた日頭
- 〃創価学会を切る〃という前提で話を始めた日頭
- 姑息な手段で池田名誉会長の総講頭の地位を罷免
- わざわざ年末に総講頭解任を行なったのは、聖教新聞が休刊になるから

6

四、はじめに「処分」ありき。「お尋ね」文書で破たんした池田名誉会長批判

- すべてが一方的であった宗門事件の始まり
- 宗門がテープの〃改ざん〃認める
- 伝聞による決めつけも撤回
- 処分を前提にして作られた「お尋ね」文書
- 宗門の策動は「C作戦」に見事に符合

12

五、「C作戦」の動機となった二つの感情——「逆恨み」と「嫉妬」

- 自分の考えを否定し、相承しなかった先師への「逆恨み」
- 「劣等感」から池田名誉会長を「嫉妬」
- 「コンプレックス」から、常に権威を見せつけようとする日頭
- 池田名誉会長が自分よりも上であることが「許されるのか！」と激怒した日頭

15

六、宗門の根深い僧俗差別義を肥大化させた日頭

- 教学部長時代から池田会長の功績を否定していた日頭
- 江戸時代から時間が止まっている宗門
- 学会員は住職の家族やペットよりも下
- 出家しても、在家出身者は差別される
- 小僧でも、池田名誉会長より上と教えていた本山
- 信心にも僧俗差別。「三十分以上の唱題は弊害がある」と指導した日頭

18

七、僧俗差別は人間の可能性を矮小化し、僧侶の墮落の原因となった

- 信徒をかましてやれ〃と言ひ、民衆を「ボンクラ」と見下す日顕
- 「有智は僧侶、無智は在家である」と説法する日顕
- 「凡夫即極」の教えに背き、衆生の「仏界」を踏みにじる日顕
- 僧侶の墮落の温床となった「僧俗差別」
- 宗門の折伏は供養させる信徒を増やすため。だから成果が出ない
- 「創価学会の折伏はワシが許可してやったんだ」と言った日顕

八、仏法史上、類のない日顕の大罪

- 創価学会の破門は、世界的規模の暴挙
- 多額な経済的損害をもたらし、会社役員を自殺に追い込んだ「月例登山の廃止」
- 本山の観光地化を阻止するために始まった「登山会」
- 創価学会破門は、「破和合」の大罪、墮地獄の因
- 正本堂破壊は、供養した人々の真心を抹殺する蛮行
- 日顕のシアトル裁判出廷時期と符合する正本堂解体の発表
- 自分の都合で簡単に前言を翻す、無責任な日顕
- 池田名誉会長の「慢心」をでっち上げた正本堂説法は訂正
- 日達法主の時代を象徴する正本堂が目障りだった日顕
- 世界が驚いた正本堂破壊。「寺院破壊」はテロ行為
- 正本堂の解体をモニターで見て、喜んでいた日顕の異常性

九、法主の座を盗み、宗門衰退の原因を作った日顕

- 自分の野望を実現するために、名乗り出て法主になった日顕
- 日達法主から信用されていないことに腹をたて、法主批判と大御本尊否定
- いまだに相承の証拠を出せない日顕
- 相承疑惑により不安定な自分の立場を、「法主絶対」という己義で守ろうとした
- 法主に対する合掌を徹底。権威で尊敬を強要した日顕
- 日達法主時代の建物を破壊することによって、相承疑惑を封じ込めようとした日顕
- 歴代会長を賛嘆していた先師に違背し、宗門の歴史を否定
- 歴史に残る宗門の汚点。大聖人、日興上人の精神に違背。信徒の供養で遊興し、供養された建物を壊す宗派など、誰からも信用されない
- 未来がない宗門。大坊の荒廃と「法教院」の失敗

十、〈結論〉日顕の完全敗北

- 日顕の打つ手はすべて失敗
- 日寛上人書写の御本尊に対する難癖はすべて崩壊。ニセ本尊でないことを一番、わかっているのは、日顕
- 日顕書写の本尊は消え、日寛上人書写の御本尊が世界に流布
- 最高裁でも敗北続きの日顕は必ず、除歴されるであろう
- 破門以降、宗門は衰退するばかり
- 破門以降、学会は大発展。三百になろうとしている池田名誉会長への名誉学術称号
- 日顕の怨念から生まれた今の宗門は「日顕宗」
- 実行部隊の中心者であったことを告白していた早瀬日如
- 永遠に創価学会に依存する日顕宗
- もはや日蓮正宗は存在しない
- 今、宗門がやっていることは、全部、創価学会のサル真似
- 創価学会こそ、世界の民衆を救う「法師」の教団

Ⅱ 「C作戦」 20年目にあたり、日頭の完全敗北を宣言するⅡ  
日頭書写の本尊は消え失せ、日寛上人書写の御本尊が世界に流布。  
これこそ、日頭の完全敗北の実証である。

### はじめに

平成二年七月十八日、大石寺で秘密裏に行なわれた御前会議で、日頭自ら〃池田名誉会長追放〃の作戦名に対して、「C（CUTの略）だよ」と命名した。

「創価学会分離作戦」、通称「C作戦」の目的は、在家信徒組織である創価学会を解体し、寺院中心の教団、すなわち僧侶優位の体制を再編成することにあった。そして、日頭は創価学会員を完全な支配下に置き、その僧侶中心の教団の頂点に君臨しようとしたのである。

「C作戦」の内容は以下の通りである。

（福田教道が清書した『創価学会分離作戦（C作戦）』より抜粋）

#### 〈目 的〉

この計画作戦の目的とするところは、池田名誉会長を総講頭から解任し、日蓮正宗は創価学会とは無縁の宗教団体であることを一般世間に公表し、創価学会組織の徹底壊滅を図り、もって純粋なる信仰に基づく金甌無欠の組織の再編成を目的とする。

#### 〈作戦次第〉

##### 第一段階

（平成2年8（ママ）月28日、臨時宗会において議決する。）

必要なる宗規の改正。「第158条、第223条、第226条、第227条、第228条等」

##### 第二段階

（平成2年8月13日、連絡会議の席上で通告する。同日、宗務院の指示により、全国末寺御講において、三宝の権威の称揚と信徒の三宝帰依の義務を内容とする統一法話の実施。）  
池田名誉会長の総講頭からの解任ならびに創価学会最高幹部への通告。

日頭の〃信徒を完全に支配する〃という野望を実現するために、最大の障害となるのは、池田名誉会長の存在であった。普通に考えれば、多くの会員から尊敬され、また、世界のトップクラスの要人や識者から信頼を得ている池田名誉会長は、宗門にとって誇るべき存在である。しかし、宗門最高位の法主として権勢を誇示したい日頭は、その偉大な人格が目障りとなり、池田名誉会長を追放するため、ついには「C作戦」実行の愚挙に出た。

そして平成二年十二月二十七日、創価学会には何の連絡もなく、「宗規改正」を理由に池田名誉会長は総講頭の地位より実質的に罷免された。

このような謀略が宗門中樞で画策されていたことを、一般僧侶はまったく知らなかった。故に、末寺住職はかなり困惑し、中には宗門中樞の不当なやり方に不信を持つ者もいた。しかし、日頭と宗門中樞は、このような宗内僧侶の意見を一切封殺するだけではなく、学会からの再三の「対話」の求めも拒否したうえ一方的な処分を次々と発動した。

平成三年七月には学会運営の登山会を一方的に廃止し、檀徒作りを進めるよう大号令をかけた。そして、遂に平成三年十一月二十八日、創価学会を「破門」したのである。

日頭がこの仏法史に残る破和合の逆罪・「C作戦」を画策して、今年で二十年目となる。この節目にあたり、我々はこの日頭の蛮行を歴史に留め、そして同時に日頭の完全敗北を宣言するために、もう一度、ここで「C作戦」を検証する。

## 一、「C作戦」は日頭の昔からの考え

### ●日頭が名付けた「C作戦」

「C作戦」を協議した様子を記録した河辺慈篤のメモ（通称「河辺メモ」）には、平成二年七月十八日に大石寺大書院で行なわれた「御前会議」の内容について、以下のような記述がある。

早瀬部長よりの連絡会議報告の後、池田追放の線で進られ、河辺〓それでは、この作戦はG作戦だ。猊下〓それは違う、Cだよ

河辺は〓池田名誉会長追放の作戦〓を創価学会の「学会」の頭文字をとって「G作戦」と呼ぼうとしたが、日頭自ら「C作戦」と命名したのだった。

このことを裏付ける証言がある。平成三年三月五日、工藤玄英住職と大橋正淳住職が本山の大奥で日頭と会見した。その際に、大橋住職が「C作戦」の存在を日頭に質問すると、日頭は憎々しげに答えた。

「じゃ言ってみるか、あれはだな、あの野郎の首をカットするという意味だ」

そう言いながら、日頭は指を突き出し、宙に「C、U、T」と書いて見せた。日頭が言う「あの野郎」とは、池田名誉会長のことである。

大橋住職はその宙に書いた字を読みながら、確認した。

「カットという意味ですか？」

すると日頭は間髪いれずに答えた。

「そうだ、そのカットの頭文字を取ってのC作戦だ」

そして言い訳をするように付け加えた。

「とっさに思いついてやったことじゃない。五、六年も前から考えに考え抜いてきたんだ」

日頭は「C作戦」を〓五、六年まえから考えていた〓と言っているが、これは〓C作戦実行のタイミング〓についてのことである。

### ●末寺住職の時から、寺院中心の体制を考えていた日頭

〓信徒を完全に支配する〓という「C作戦」の原型については、日頭は末寺住職の時から、すでに持論として心に秘めていた。それを証明する日頭の発言がある。平成四年八月二十八日、本山で行なわれた全国教師講習会での発言だ。

「終戦後、私は寺院において法華講を作って広布への御奉公を志しました。しかし、当時はまさに創価学会の興隆期で、色々な意味でぶつかったのです。ぶつかりぶつかり、ぶつかった上で、『これからの宗門においては創価学会を外して考えるべきではない』と言われ、そこで私は、寺院における僧俗和合という、自分の広布推進の考えは一時、見合わせ、創価学会が広宣流布の団体なんだ、僧侶として学会の発展のためにできる限りの援助をしなければならぬということに到達したのであります。」

まず、日顕は「終戦後、私は寺院において法華講を作って広布への御奉公を志しました」と述べているが、これは真つ赤なウソである。実際には、日顕は学会員を脱会させて、檀徒作りをしていた。

日顕は昭和二十二年に東京・向島の本行寺住職に任命された。しかし、本行寺は戦争で焼失しており、日顕は周りの者に「なんでオレがこんな所に来なければいけないんだ」と嘆いていたという。

日顕はこの頃から、創価学会に偏見を抱いていた。たとえば、日顕は戸田会長について以下のように述べていたという。

「明治時代や徳川時代にもすごい信者が出て盛んになったことがあった。しかし、途中から自己中心的になった。戸田先生もみんなのためにやっているけど、やがては、そうした人と同じように、自分のためにやるんじゃないですか」

そして日顕は深川のある会員を脱会させて法華講の講頭に据え、檀徒作りを画策した。

学会幹部が本行寺に抗議に行くと「創価学会員である前に日蓮正宗の信徒であります」と、檀徒作りを正当化しようとした。

### ●檀徒作りをして、戸田会長に叱責された日顕

やがて、日顕の檀徒作りは戸田会長の知れるところとなり、日顕はある日、戸田会長から直接、叱責された。

そのことを日顕は、『大日蓮』昭和三十三年五月号に寄せた「戸田会長先生の御逝去に対して」と題する一文の中で、こう述べている。

「私の罪障と云はうか、(戸田)先生の云ういはゆる坊主根性の為か、昭和二十四年頃の私は、自らの心にある垣根を作り、それが円融闊達にして師厳道尊なる先生の精神に半ば通じない事があったのは、今更遺憾慙愧此の上もないのである。」

日顕は戦後間もない頃から、檀徒作りという破和合の悪行を積極的に行っていた。その日顕の卑しい心根を戸田会長は「坊主根性」と厳しく弾呵したのだ。

### ●先師に面従腹背していた日顕

その日顕の不穏な動きを知った日達法主はもちろん、黙ってはいなかった。日顕に、「これから宗門においては創価学会を外して考えるべきではない」と言ったのは、日達法主である。

日顕は「寺院における僧俗和合という、自分の広布推進の考え」を先師から否定され、その場ではその指南に従ったように見せたが、それは決して、自分の考えを改めたのではなく、「一時、見合わせ」たと述べている。

これでは、〃自分は先師に面従腹背していた〃と告白しているようなものである。

この日頭の発言の裏を返すと、こうなる。

「これからの宗門においては、創価学会を外して、寺院における僧俗和合を考えるべきである」

これが、日頭の一念の奥底にあった、元々の考えである。

日頭は「寺院における僧俗和合」という言葉を使っているが、この「和合」とは、僧侶と信徒が協力し合うという意味ではなく、信徒が僧侶に服従することである。その基底には僧俗の差別がある。

その証拠に、今の宗門の姿がそうである。儀式の執行はもとより、御書講義、信心指導は僧侶にしか許されない。信徒はただ、僧侶に従うだけであり、幹部は連絡係でしかない。

そして、この「創価学会を外して」という日頭の考えこそ、「創価学会分離作戦」、通称「C作戦」の原型である。

すなわち、「C作戦」は二十年前に突如、日頭が思いついた作戦ではない。日頭が元々抱いていた、宗門のあるべき姿なのである。

では、なぜ、日頭はこのような考えを持つようになったのか。日頭が目指していたものは何なのか。引き続き検証する。

## 二、登座した時から「檀家制度」の復活を目論んでいた日頭

### ●「祖道の恢復」とは「檀家制度」の復活

日頭は登座した際に、「祖道の恢復」を唱えた。「恢復（回復）」とは、辞書によれば、「①一度悪い状態になったものが、元の状態になること。②一度失ったものを取り戻すこと。」（大辞林）とある。

では、日頭にとって「元の状態」「失ったもの」とは何か。それは今の宗門の主張を見れば明らかだ。

「僧侶の引導がなければ成仏しない」「戒名がなければ成仏しない」等々、僧侶抜きでは信徒は成仏できないというのが今の宗門の論法である。これはどこから来ているか。それは「檀家制度」である。

「檀家制度」は江戸幕府がキリスト教禁制を徹底させるために始めた制度である。人々は所属する宗派や寺院を決め、その所属する寺院が檀家であることを証明する「寺請証明書」を発行した。この証文がなければ、檀家は就職も旅行もできなかった。

初めは、家族各自が寺を変えることを許していたが、のちに家ごとに菩提寺を定めさせ、離檀を禁止した。そこから、家ごとに仏壇をおく風習が生まれたと言われている。そして寺は、その檀家の家族全員の名前を記した「人別帳」を管理した。

その結果、檀家は出生から死亡、移転や婚姻などすべて寺に届け出なければならぬことになった。法要・墓地・位牌・過去帳などはもちろんのこと、寺は檀家の生活全般にわたって管理していたのである。

### ●現宗門の実態は「檀家制度」そのもの

このように、仏教寺院は戸籍事務等を扱い、幕府の庶民支配の出先機関として重要な役割を果たしたことになる。

そして、その見返りに、法要の際には僧侶を招くという慣習が定まり、寺院に一定の信徒と収

入が保証される形となった。

同時に、僧侶には、檀徒の死後、死相を見届け、檀徒であることを確認して、戒名を授け、引導を渡すことが義務づけられた。檀徒は、僧侶を呼ばなければ、キリシタンの疑いをかけられ、極刑に処されるという恐怖から、必ず葬儀には僧侶を招いた。

今、宗門が主張している「葬儀に僧侶を呼び、引導を渡してもらおう」という慣習は、この江戸時代の檀家制度の名残ではない。

すなわち、日顕が回復しようしたのは、今の宗門の現状から分かるように、決して「日蓮大聖人の時代の僧俗和合の姿」ではなく、創価学会が出現する以前の体制、江戸時代から続いた「檀家制度」とそれに付随する僧侶の権力——信徒の生殺権をも握る権力——だったのである。

#### ●創価学会の法人取得に反対していた日顕

創価学会が昭和二十七年に法人を取得しようとした際に真つ先に反対したのが日顕だった。日顕は平成四年八月、本山の教師指導会で次のように述べた。

「私は、はっきり申し上げて反対の立場でした。ですから、あの当時、堀米日淳上人が常泉寺の住職をしておられて、私はその前の本行寺の住職でしたから、別の宗教法人を作ること認めることについては反対である旨を率直に申し上げた」

日顕の持論から言えば、信徒が法人として宗門と同格の資格を持つことなど、絶対にあってはならないことだったのだ。

このことから、日顕の言う「祖道の恢復」とは、信徒が無力で僧侶に依存し、常に僧侶が優位な立場にある状態に戻すことであることは明確だ。それこそ、檀家制度そのものである。

日顕が「祖道の恢復」という建前で復活させた〃現代の檀家制度〃とも言うべき、今の宗門の体制で、信徒は何と教えられているか。——「葬儀に僧侶を呼んで、戒名をつけてもらい、引導を渡してもらわないと成仏できない」と、成仏するかどうかは、生前の信心ではなく、僧侶次第であると徹底されている。

#### ●「二十万人がつけばよい」の「二十万」は僧侶が生活するために必要な信徒の数

もう一つ、日顕が檀家制度を復活させようとしていたことを裏付ける傍証がある。

平成二年十二月二十五日、日顕は反学会勢力の面々と懇談し、次のように発言している。

「学会員のうち二十万人が本山につけばよい」

この「二十万人」という数字はどこから出てきたものなのか？ 実は、仏教界の裏話の一つとして、〃末寺は二百人から三百人の檀家がいれば、生活できる〃というものがある。宗門の約六百箇寺にそれぞれ三百名前後の檀家として計算して、「二十万人」としたのである。すなわち、日顕が示した「二十万人」とは、末寺と本山を食わせるための信徒の数ということだ。

日顕は創価学会の全会員を教導しようとしていたのではない。ましてや、広宣流布のために何かをしようとしていたわけでもない。自分たち僧侶が食っていける体制を作ろうとしたのだ。まさに、これこそが「檀家制度」なのである。



### 三、創価学会を賛嘆しながら、裏で学会攻撃を謀議していた日頭の二面性

#### ●「河辺メモ」が明かす二回の秘密会議

河辺の会議メモによれば、平成二年七月、日蓮正宗首脳の七人の僧侶によって二回にわたり学会破壊のための秘密会議が開かれた。

参加者は、阿部日頭、藤本日潤（当時は総監）、早瀬義寛（現法主の日如、当時は庶務部長）、秋元広学（当時の渉外部長）、八木信瑩（当時の大石寺主任理事）、関快道（当時の海外部主任）、河辺慈篤（当時の日蓮正宗参議）である。

特に河辺は宗内で「戦略家」として有名であったため、〃指南役〃としてこの会議に参加していた。

まず、第一回会議（通称「西片会議」）は七月十六日夕刻、当時、東京の文京区西片にあった大石寺東京出張所で秘密裏に行なわれた。

この「西片会議」で、日頭が池田名誉会長の「追放」を叫び、周到に学会破壊の作戦が練られていたことがはっきりと記されている。そのことを河辺は「注」として次のように書いている。

注〃以上の方向で会議が進められていたが、特に、猥下は「池田追放」「特財・財務中止」と激しい口調で強調されていたが、河辺が「こんな事を現状の宗門でやったら両刃の剣となる。やるなら、先づ宗門の綱紀を糾し、その上でやるべきだ」と、又、藤本も「投書は伝聞（本人に電話で問い合わせ伝聞と分る）であるので、根拠に問題がある」と諫めた結果、猥下及び全員のトーンが下る。

結局、18日午前9時、総本山大奥に於て、今日のメンバーが集合し、再会議という事で結論を持ち越し西片会議終る。

当時、僧侶の贅沢や遊興が問題となっていた。昼間はパチンコやゴルフに精を出し、夜は酒場に繰り出していた住職の姿が、多くの信徒に目撃され、墮感を買っていた。

いくら日頭が「池田追放」を主張しても、住職の遊興問題を追及されると、学会を攻撃できないと、河辺は訴えた。

この住職の遊興問題は、言わば「宗門のアキレス腱」であり、引き続き、二回目の会議でも焦点となった。

#### ●「御前会議」で日頭が「C作戦」と命名

その二回目の会議は、平成二年七月十八日午前九時、大石寺の大書院で行なわれ、通称「御前会議」と呼ばれている。

前回の継続会議として開かれたこの会議では、学会破壊の謀略の作戦名として日頭の口から「C」という言葉が飛び出し、「C作戦」の命名者が日頭であることがはっきりと記されている。

〈河辺慈篤「会議メモ」より〉

御前会議の流れ

早瀬部長よりの連絡会議報告の後、池田追放の線で進られ、河辺〃それでは、この作戦はG作戦だ。

猥下〃それは違う、Cだよ。

ともかく（7月）21日の池田の目通り（が）山だ。

もう少し池田の証拠を集めて、C作戦の時を待つ。

● // 僧侶の遊興問題に対処しないと作戦は失敗する // と河辺が慎重論を唱える

日頭は「池田追放」を断行しようとするが、前回の時と同じように、河辺が僧侶の「綱紀自肅」の必要性を説いた。はじめは、日頭は納得しないが、他の者たちが河辺に同調し、結果として、創価学会攻撃の体制を整えるために、八月末の宗門の「教師指導会」で「綱紀自肅」を打ち出すことが合意された。そのことが「河辺メモ」に克明に記されている。

〔河辺慈篤「会議メモ」より〕

河辺 // C作戦というが、いずれはやらなくてはならない問題としても、今この問題をやる事は両刃の剣を持つ事になる。やるとしても、もつと分析が必要。それよりも大事な事は、僧侶の綱紀自肅が必要。この作戦を実行しても、返す刀で、この綱紀問題で学会にやられる。

梶下 // お前は分析、分析というが、分析して何ができると云うんだ。

|| 激しく怒ったように河辺を叱責 ||

河辺 // いえ、綱紀を乱さなくては必ず学会からやられる。綱紀自肅の指導を教師指導会でやるべきだ。それから学会問題をやるべきだ。

藤本 // 私も河辺の云う通りと思う。今この問題をやれば両刃の剣となる。

河辺 // 学会相手に戦う時は、日刊の聖教を相手に戦う事になる。宗門はこれに対抗するものはない。

梶下 // 皆んなは、この河辺の意見に対しどう思う。

|| 全員無言で河辺に賛成の表顔 ||

早瀬 // 私も河辺の意見の方がいいと思う。

以上の意見のやりとりが昼食をはさんで続き、結局、池田追放の件は当分見合せ、僧侶の綱紀自肅という事になり、来る八月末の教師講習会で綱紀自肅に関する指導会を開く事になる。そのための会議を開く事に決し御前会議終る。

● 「C作戦」実行のために徹底された、偽りの「綱紀自肅」

平成二年八月二十九日、三十日、大石寺で教師指導会が開かれ、そこで二十一項目の「綱紀自肅」が徹底された。その内容を一部抜粋する。

「少欲知足を旨として、行住座臥に身を慎むこと。妄りに遊興に耽り僧侶として信徒や一般から非難・擧感を買うような言動は厳に慎むこと」

「僧侶としての品位を汚すものは禁止する。また、華美・贅沢なものは慎むこと。寺族の場合もこれに準ずる」

「価格・車種などそれぞれの分を弁え、決して贅沢なものは選ばないようにすること。また、僧侶として相応しくない形や、赤い車など、派手な色は禁止する。寺族の場合も、僧侶に準じて自肅すること」

どれも、僧侶であれば、当然、守るべき徳目である。これは裏を返せば、

// 遊興に耽って、信徒や一般から非難・擧感を買うような住職が多くいた //

// 華美・贅沢なもので身を包んでいた住職、寺族（住職の家族）が多くいた //

// 高価な車、派手な色の車に乗っていた住職、寺族が多くいた //

ということになり、多くの住職が堕落していたという事実の証明である。

一番の問題は、この「綱紀自肅」の目的である。本来であれば、これを契機に宗門の僧侶が信心の姿勢を改めて、僧侶として恥ずかしくない言動につとめようというものでなければならぬ。ところが、実際にはそうではなかった。「河辺メモ」にあるように、〃創価学会を攻撃するためには、これ以上、弱みを見せてはならない。体制を整えて、「C作戦」実行の準備をする〃という謀略のための体裁でしかなかった。

●「綱紀自肅」を発表した当日、一人十五万円の高級温泉旅館に泊まった日顕夫妻

この「綱紀自肅」が、あくまでも創価学会からの追及を逃れるための見せ掛けであったということを実証したのが、他ならぬ、日顕であった。

平成二年八月三十日、日顕は綱紀自肅を発表した教師講習会が終わるやいなや、伊豆長岡へと出かけ、有名な高級旅館に泊まった。

当時の従業員証言によれば、このとき泊まりに来たのは、日顕夫婦、息子の阿部信彰夫婦、石井信量夫婦の六人であった。

日顕夫婦が泊まった部屋は一人十五万円の最高級の部屋。五十坪の部屋に七百坪の庭がついている。その部屋で日顕は十万円もする特別懐石料理に舌鼓を打った。

日顕は八月三十日の教師講習会閉講式で再度、綱紀に言及し、

「昨日の指導会における自肅の意味をよく考えていただき、その根本はやはり我々の不断の信心と行学にある」

と指導していた。

ところが、自分はその「綱紀自肅」を完全に無視して高級旅館で豪遊する。日顕にとっては「綱紀自肅」など、はじめから創価学会を欺くためのポーズでしかないから、こういうことが平然とできたのだ。すなわち、日顕は「C作戦」という謀略のために、宗内の僧侶までも欺いていたのである。

●遊興に溺れることを恥と思わない日顕ファミリー

日顕の豪遊は、かなり以前から続いていた。前述の高級旅館の元従業員は次のように証言している。

「日顕さんは奥さんや、息子の信彰さん、娘の百合子さん夫婦と毎月のように来ていましたよ。日顕さんの運転手に聞いてみれば一番よく分かりますよ。当時、旅館には、十五万円の部屋が二つあったんですが、日顕さんは必ずそのどちらかに泊まりました。予約はいつも石井信量さんがして、総監の藤本さんや八木信登さん、早瀬義寛さん、大村寿顕さんらもよく来ていました。多い時で二十二、三人、いつもは十六、七人で、運転手もいれると十数部屋は借り切っていましたね」

また、この元従業員によると、日顕らが散財した金額は、平均すると宿泊費と食費で、一人二〇万円だという。そして、日顕ファミリーが来ると一回で三〜四百万円は使い、日顕らは、その豪遊を月に一回程度おこなっていたという。

日顕らが異常なのは、遊興に溺れることを恥と思わないことである。その日顕が散財しているお金はすべて信徒の浄財である。信徒の浄財で己の欲望を満たす。日顕のこの姿はまるで大聖人在世の極楽寺良観である。

### ●早瀬ファミリーも阿部ファミリーと同じ

早瀬一族の贅沢も阿部一族と同じである。早瀬日如が住職であった新宿の大願寺は昭和六十三年に改築された。改築費は約十億円。早瀬は「学会の世話にはなっていない。全部、俺がキャッシュで払った」と自慢したが、そもそも、そのお金はすべて学会員の浄財である。

贅を尽くしたその造りは、見かけはまるで高級料亭である。玄関の表札だけで二百万円、本堂の柱一つをとっても、巨大なケヤキの無垢材。庫裏にも、秋田杉やケヤキ、ヒノキなどを、ふんだんに使い、台所には女房の背丈に合わせてオーダーメイドした七百万円以上もするドイツ製のシステムキッチン、住職家族専用のエレベーターも備えられていた。

早瀬日如の弟は日顕の娘・百合子と結婚したが、その弟が住職をしていた板橋区の妙国寺も、末寺きつての贅沢建築〃と宗内で有名だった。台所には三千万円もする厨房設備に、五百万円の焼き肉テーブル、一部屋がまるまる貯蔵庫という豪華な造りに〃やりすぎでは〃という住職がいたほどだ。

また、早瀬日如の長女の結婚披露宴は、都内の超一流のホテルで盛大に行なわれた。まるで、大物財界人の子息か芸能人のようであった。

このように早瀬ファミリーも日顕ファミリーと同じように、信徒の浄財で贅沢することに、まったく後ろめたさを感じていないのだ。

### ●「C作戦」を謀議しながら、開創七百年慶讃大法要で学会を賛嘆していた日顕

今回の事件の特筆すべき点は、その謀略性である。

まず、日顕らは「西片会議」「御前会議」で「池田名誉会長追放」を謀議し、体制を整えるために「網紀自肅」を徹底した。

そしてその間も、日顕は表面では池田名誉会長と創価学会を賛嘆し、自分たちの謀略を創価学会に覺られないようにしていた。

十月七日、開創七百年慶讃大法要の初会が大石寺において開催され、その席上、日顕は池田名誉会長を讃える「慶讃文」を読み上げている。

「近年ニ至リ信徒団体創価学会ノ興ルヤ折伏弘通大イニ進ミ正法受持ノ信徒マタ數ウルヲ知ラズ 故二本仏出世ノ本懐タル本門戒壇ノ大御本尊ハ御宝蔵ヨリ奉安殿へ更ニ先師日達上人ノ代池田總講頭發願ノ正本堂ニ安置セラルル来正本堂ハ有縁信徒千万ノ懺悔滅罪ノ大堂タリ洵ニソノ功德重且ツ大ナリト云フヘシ 其ノ他ノ總本山境域マタ種々ノ綜合整備時ヲ逐テ進捗スル半面末寺ノ建立寄進相繼キ未曾有ノ正法興隆ノ相ヲ現出ス」(『大日蓮』平成二年十一月号)

日顕は池田名誉会長を中心とした創価学会の正本堂の建立寄進や本山整備の功績を最大に讃えた。

その一方で、十一月二十日、二十一日に大石寺で御大会大法要がおこなわれたが、このとき出仕した僧侶たちとの「目通り」の席で、

「百姓覚悟の時がくるかもしれない」

と発言をしている。その真意は、「C作戦」が発動されれば、最悪の場合、信徒数が激減するかもしれないという意味であったに違いない。

●「C作戦」実行直前にも池田名誉会長を賛嘆する原稿を書いていた日顕

この同じ十一月二十日、日顕は『大白蓮華』（平成三年一月号）掲載の「新年の辞」の原稿を創価学会に渡している。

この原稿の中で日顕は、創価学会及び池田名誉会長に対して、次のように賛嘆している。

「創価学会創立六十一年の出発に当たり、私ども宗門においても、心からその功績を賛嘆いたします。

戸田先生の逝去後、間もなく、第三代会長の任に就かれた池田先生は、鉄桶の組織と当千の人材を見事に活用され、且つ、信心根本の巧みな指導をもって国内広布の大前進を図り、十倍もいふべき多大の増加を来したことは、耳目に新しいところであります。

特に、池田先生の指揮において大書すべきは、戦後の世界的な移動交流のなかで、各国に広まった信徒の方々を組織化した、世界広布への大前進が図られたことであります。今日、地球的規模による広布の着々たる進展がみられることは、撰時抄の御金言のごとく、実に広布史上素晴らしいことと思います。

また、戸田先生のころより始まった総本山への諸供養や末寺寄進は、池田先生によって本格的に行われ、先師日達上人の数々の賞辞が残っております」（『大白蓮華』平成三年一月号）

ここでも、日顕は池田名誉会長の世界広布の実績と本山外護の功績を称賛している。すなわち、日顕は「C作戦」遂行を容易にするため、自分の意図を覺られないように、「綺語、両舌」を用いて、信徒を欺いていたのだ。

●〃創価学会を切る〃という前提で話をし始めた日顕

十一月二十八日、富士学林研究科閉講式で日顕は、広宣流布が進展したことについて次のように発言している。

「我々僧侶の面から見たときに、果たしてこれでもいいのか」

「開創七百年を過ぎて、その初めの一年に当たってすべての問題をもう一遍、我々が考え直し」「今までとは色々な面で多少違ってくる」

「我々僧侶の面から見たときに」「すべての問題をもう一遍、我々が考え直し」と言っているように、すでに日顕の頭の中では、「僧侶主体の広宣流布」が始まっていたのだ。

そうした中で、十一月十六日の創価学会第三十五回本部幹部会での池田名誉会長のスピーチの内容が、日顕に伝えられた。日顕は、このスピーチが創価学会を攻撃するための口実になると飛びついた。

十二月十二日、日顕らは池田名誉会長のスピーチの反訳をもとにした「お尋ね」文書について伊豆長岡の高級温泉旅館で、午前五時から〃従業員立入禁止〃にして、謀議していた。

そして翌日の十二月十三日、創価学会との「連絡協議会」で宗門は、学会に「お尋ね」文書を渡そうとした。しかし、創価学会側は、「改竄されたテープであったり、不確かなものであった場合、それを根拠に公式文書としたのでは、総監の重大な責任問題になる」と指摘し、話し合いによる解決を要望した。この日、宗門側は、仕方なく、同文書を引っ込めた。

この翌日、日顕は自分の誕生祝賀会で、伝聞を根拠に書いた「お尋ね」文書の内容をそのまましゃべっている。

日頭は、学会の名前を出しはしなかったが、「親鸞と大聖人とを比較して、大聖人は強すぎるイメージがある。そういう強いイメージではこれからの広宣流布はできないというような考え方があ  
る」と暗に学会批判し、「これからいろいろと難しい問題がますます出てくる」と話している。

そして、十二月十六日、宗門は創価学会側が「連絡協議会」で受け取らなかった「お尋ね」文書を創価学会に送付する。

十二月二十一日、日頭は創価学会からの二百力寺建立寄進の百十一番目となる三重・仏徳寺の入仏式を執り行なった。創価学会を切ろうとしておきながら、そ知らぬ顔で寄進をうける。〃も  
らえるものは何でももらう〃という、実に意地汚い姿だ。

その法要の挨拶で日頭は波木井の謗法を通して話し始めた。

「今まで存在しておった間違いを一切打ち破り、誤りは誤りとした上で、あくまで正しいものを立てようというところに正応三年の大石寺の建立の意義があったのでございます。」

これは、身延離山の意義になぞらえて、暗に学会処分  
の意義づけをしていたのだ。

また、法要後の住職たちとの目通りで、日頭は「来年から厳しくなるぞ」とほのめかしていた。

日頭は「お尋ね」文書に対して、創価学会側が謝罪してくるものと思っていたようだ。だから、強気で学会批判をしていたのだ。

ところが、十二月二十三日、創価学会より、藤本総監宛に「お伺い」文書が送付された。内容は、宗門の権威主義的体質を九項目にわたって指摘し、話し合いによる解決を要望したものであった。

### ● 姑息な手段で池田名誉会長の総講頭の地位を罷免

この創価学会からの「お伺い」文書によって、日頭の「C作戦」実行の計算が狂ったに違いない。日頭は「お尋ね」文書で創価学会に謝罪させ、池田名誉会長を切るつもりだったのだろうが、それが不可能になったのだ。

十二月二十五日、日頭は高橋公純、段勲ら五名と創価学会を解体するための密談をしている。その場で日頭は、次のような発言をしている。

「学会員のうち二十万人が本山につけばよい」  
「創価学会との裁判になることが充分に考えられる。その時は証人になってくれ」

日頭はこの時点でも創価学会を切ることを前提に話している。もうそのことしか、日頭の頭にはなかったのだろう。創価学会と池田名誉会長を切る理由など、どうしても良かったのだ。とにかく、自分が頂点に立ちたいという欲望にとりつかれていたのだ。

創価学会は、話し合いによる解決を求めたが、十二月二十六日、宗門は〃誠意ある回答なし〃と決め付けた「書面」を創価学会に送付した。

そして、日頭は、暮れも押し詰まった十二月二十七日、臨時宗会を開いて、池田名誉会長の法華講総講頭の資格喪失を決め、その通知書を学会本部宛に送りつけたのだ。

この池田名誉会長の総講頭解任は、表向きは、単に日蓮正宗の規則である「宗規」改正にともなう措置として発表された。宗門はマスコミにも「解任でも処分でもない」とコメントしていた。

現法主の早瀬は当時、庶務部長で大願寺の住職であったが、在勤者に

「池田名誉会長の総講師解任は処分じゃないからな。必ず、そう説明するんだ」と徹底していた。

ところが、その十日後、平成三年一月六日に本山で行なわれた教師指導会で日頭は、学会が「お尋ね」に対する回答をせずに九項目の質問をしてきたことに触れ、

「このような形は、全く反省の色もなければ、誠意もないという上から、かねての懸案の法華講本部役員の問題に関する『宗規』の改正にも踏み切ったのであります」

と述べ、この翌日の本山の従業員の勤行会でも

「信仰の念がほとんど認められない姿で宗門に対してはつきりと反抗してくる、文書を送りつけてくるというような形が、現総講師、現大講師の姿の中にありましたので、やむをえずここで緊急の宗会を招集し」

と、総講師解任は明らかに学会に対する制裁であると述べている。

このように、日頭は池田名誉会長に対する嫉妬の怨念を隠すために、信徒だけでなく、マスクミを通して社会をも欺いていたのだ。第二次宗門事件はこの日頭の謀略の大嘘から始まったのだ。

●わざわざ年末に総講師解任を行なったのは、聖教新聞が休刊になるから

日頭がわざわざ年末を狙って、池田名誉会長の総講師解任を発表したことにも理由がある。日頭は聖教新聞が休刊になる時期を選んだのである。

聖教新聞が休刊になれば、学会の対応が遅れるはずだと日頭は考えたのだ。『法華経勸持品』に「悪世の中の比丘は邪智にして」とある。まさに、日頭は邪智を振り絞って学会切り崩しの謀略を練っていたのである。

## 四、はじめに「処分」ありき。「お尋ね」文書で破たんした池田名誉会長批判

●すべてが一方的であった宗門事件の始まり

今回の宗門事件は、すべてが一方的であった。突然の「お尋ね」と題する詰問書。そして、事前に何の連絡もなく通知してきた池田名誉会長の法華講総講師の罷免。

それでも、創価学会は話し合いによる解決を求めて、当時の秋谷会長と森田理事長が本山に向いたが、日頭は「目通り適わぬ」と対面を拒否した。

そして、一月六日、日頭は末寺住職・寺族初登山の会合で「結句は一人になりて日本国に流浪すべきみにて候」と御書を引き、「一人になっても法を護ってまいります」と涙を流して訴えてみせるなど、精一杯の演出をした。

だが、この時点では多くの末寺住職は事情がよく分からず、戸惑っている者も少なくなかった。日頭は一月十日の「教師指導会」でも、「粥をすすめるようなことがあっても」正義を立てていくと、悲壮な決意を披露する。

しかし、末寺住職の反応は鈍く、日頭は「広宣布したらドイツでも『歓喜の歌』は歌えなくなる」と支離滅裂なことを言い出したり、「たんなる御本尊書写係で終わっていいのか!」と怒り出す場面もあった。

日顕一人が感情的になり、創価学会批判の旗を振っているという感じであったが、それは仕方ないことだった。日顕は「C作戦」という謀略を誰にも気付かれないように、宗内僧侶も欺いていたのだから。

### ●宗門がテープの〃改ざん〃認める

宗門が入手した平成二年十一月十六日に行なわれた創価学会の本部幹部会での池田名誉会長のスピーチのテープの反訳をもとに作成された「お尋ね」文書の内容は、池田名誉会長が法主や宗門僧侶を批判する発言があったとして、釈明の回答を求めるものだった。

創価学会側は、この文書の前提になっているテープの出所が不明で、改ざんされた恐れもあると、納得のいく話し合いを要望した。ところが、宗門側は話し合いを拒否して、文書による回答を執拗に迫った。

結局、同文書のなかには、名誉会長の話のテープの反訳を、意図的に改ざんした箇所が含まれていた。

この点を学会から指摘された宗門は、平成三年一月十二日、謝罪と撤回を余儀なくされた。

以下、宗門がテープの反訳の間違いを認めた文書とその主な箇所である。

#### (宗門からの返答)

宗務院として、この回答(『お尋ね』に対する回答)を一読し、改めて池田名誉会長のスピーチを聞き直しましたところ、確かに当方のテープの反訳に、下記のとおり相違がありました。(中略) 故意によるものではなく、テープが聞き取りがたかったことによるものであります。ともかく相違していた点、及びそれに基づいてお尋ねした件に関してはお詫びし、撤回します。(『お尋ね』に対する回答)についての指摘)

#### (宗門側の反訳)

「工夫して折伏するのがないでしょう、ね。日蓮正宗で、いなかったんですよ」

#### (実際のスピーチ)

「工夫して折伏する以外ないでしょう。ね、日淳上人が一番よく分かっていますよ」

#### (宗門側の反訳)

「ただ……、真言亡国・禅天魔、法を下げるだけでしょう」

#### (実際のスピーチ)

「ただ朝起きて『真言亡国・禅天魔』。(笑)法を下げるだけでしょう」

他にも創価学会側より次の指摘があったので、付記しておく。

#### (宗門側の反訳)

「あと、ちゃんと日淳上人、それから堀猊下、全部日達上人、きちーっと学会を守ってますよね」

#### (実際のスピーチ)

「あと、ちゃんと日淳上人、堀猊下、全部日達上人、きちーっと学会を守って下さる、ね、方軌はできあがってるんです。不思議なことです、御仏智というものは」



### ●伝聞による決めつけも撤回

また、宗門は総監名で出した公式文書であるにもかかわらず、根拠のない伝聞をもとにして、池田名誉会長を批判していた。非常に悪意のある行為である。そしてそのことを以下のように、学会に指摘され、結局、宗門は撤回したのである。

#### (宗門側の主張)

「一・一六以後の池田名誉会長の発言として、大聖人と親鸞のイメージを比較し、『親鸞は親しみやすく、大聖人は強いイメージがあり、これではこれからの折伏ができない』として、『親鸞のイメージのごとき親しみが、これからの折伏の条件』のように言われ、『大聖人の慈悲深い面をもっと表面に出したり、法門の中にもよいことがあるので、それを判りやすく説く私のスピーチを元にするよう』に、と言われたそうです。」(「お尋ね」)

#### (創価学会側の主張)

「親鸞の件については、名誉会長が、いつ、どこで、誰に、どういう内容で言ったのか。この点について、総監より、是非とも責任ある回答をお示しいただきたい。」(「お尋ね」に対する回答)

#### (宗門側の返答)

「確かな筋から聞いたことではありませんが、これを提出した人を証人にすることは現時点では困難であり、出処を明かせませんので、今回はこの件について『お尋ね』を撤回いたします」(「お尋ね」に対する回答)についての指摘)

### ●処分を前提にして作られた「お尋ね」文書

日頭は本山に持ち込まれた池田名誉会長のスピーチのテープを契機に、公然と創価学会批判を始め、創価学会からの「テープの反訳が改ざんされているかもしれない」という指摘を無視して、池田名誉会長の法華講総講師の地位の実質的な罷免を行った。

その後も、宗内僧侶を前にして「一人になっても法を護ってまいります」と、まるで創価学会に宣戦布告するようなことを言い始めた。

この日頭の行動はすべて、池田名誉会長がスピーチで自分を批判しているということが前提になっていた。ところが、宗門は「お尋ね」の重大な質問部分を撤回してしまった。その結果、総講師罷免の根拠も崩れたことになり、日頭の一連の創価学会批判はすべて日頭の早とちりということになる。

何よりも、宗門は、テープの反訳の意図的な改ざんという、僧侶として絶対に許されない行為をしたのである。本来であれば、それだけで重大な問題となり、責任者である日頭の公式謝罪があってもおかしくない。しかし、宗門は簡単な文書での謝罪と撤回をしただけであった。もちろん、総講師罷免の撤回もなかった。

結局、この「お尋ね」文書は何だったのか。今、振り返れば、この文書を出した日頭の真意は、回答を求めるといふより、はじめから何とか池田名誉会長に謝罪させようという悪意のうえに作られたものである。この文書こそ「C作戦」という陰謀があったことを裏付けるものである。

### ●宗門の策動は「C作戦」に見事に符合

平成二年十二月の池田名誉会長の総講師罷免以来、一連の宗門の行動は、以下のように「C作戦」と符合している。これこそ日頭らが「C作戦」を念頭において行動してきたことを証明していると言える。

「C作戦」	実際に宗門が行ったこと
臨時宗会で宗規の改正。池田名誉会長を総講頭解任	臨時宗会で宗規改正し総講頭・大講頭を解任（平成2年12月27日）
末寺で「三宝の権威」を称賛する統一法話を実施	全国末寺で「学会は三宝破壊」と中傷（平成3年1月1日）
「緊急時局対策本部」を設置 作戦指示の権限を委譲	宗務院「時局協議会」を設置 以後、宗門文書は同会が作成（平成3年1月24日）
海外組織は宗務院海外部の指示に従うよう命じる	「海外布教の方針変更」を通告。 海外で檀徒作り（平成3年3月5日）
全国紙への広告で大量の学会員が末寺に殺到	一般紙に添書登山の広告を掲載（平成3年6月5日）
管長名で「学会は正宗と無関係の団体」と宣言。記者会見し、テレビ・ラジオで宗門の正当性を訴える	「解散勧告書」（平成3年11月7日） 「破門通告書」（平成3年11月28日） 記者会見を行い、「学会は正宗とは無関係」とテレビ・ラジオで宣言
寺院に所属する元学会員信徒を組織化し、日本全土に連合会組織を作る	脱会者を集め、全国末寺に法華講支部を結成。檀徒作りを画策する

## 五、「C作戦」の動機となった二つの感情——「逆恨み」と「嫉妬」

今まで述べてきたように、僧俗差別の意識が強い日顕は、末寺住職の頃から、心の奥に信徒組織の解体という野望を秘めていた。すなわち、「C作戦」という弾丸はすでに込められていたのだ。あとは、いつその弾丸が込められた拳銃の弾き金を引くか、そのチャンスを目顕は心待ちにしていたのである。

日顕が弾き金を引き、「C作戦」を発動した動機は何か？ それは「逆恨み」と「嫉妬」という二つの感情である。

●自分の考えを否定し、相承しなかった先師への「逆恨み」

まず、「逆恨み」は、日達法主へ向けられたものである。何に対して日顕は逆恨みをしていたか。一つには、日達法主が「寺院における僧俗和合」という自分の考えを否定し、創価学会を擁護したことである。在家を見下す日顕は、日達法主が在家である池田名誉会長の活躍を認めたとが気に食わなかったに違いない。

しかし、日顕が一番、許せなかったことは、日達法主が自分を次期法主に指名しなかったことである。

日達法主は亡くなる直前、相承をするために、対面所に床を敷くことを命じた。そして、そこに娘婿の東京国立・大宣寺の菅野慈雲と当時の御仲居・光久諦頭を呼ぶように奥番に命じた。すなわち、これから相承をしようという場に日顕は呼ばれていなかったのである。

これほど、日顕にとって屈辱的なことはなかった。日顕には自分は法主の子だ、特別だという、エリート意識がある。また、教学は自分が宗内で一番だと日達法主を見下していた面もあった。だから、日達法主が自分以外の者を後継者に指名するということは、絶対にあってはならないことだと思っただのだ。

そして、日顕はその報復として、「C作戦」を実行し、創価学会を解体することにより、日達法主と創価学会が築いた功績を帳消しにしようとした。そして、日顕は「祖道の恢復」と謳って、創価学会が誕生する前の時代に、宗門を戻そうとしたのだ。

日顕は法主の座を手に入れ、大奥に移り住んだ時に、こう吐き捨てた。

「日達上人の匂いのするものはいやだ」

この一言に、自分の考えを否定し、自分を次期法主に指名しなかった日達法主への根深い「逆恨み」の感情が込められている。

●「劣等感」から池田名誉会長を「嫉妬」

日顕に「C作戦」実行の弾き金を引かせた、もう一つの感情は池田名誉会長に対する「嫉妬」である。

法主になる前の日顕は池田名誉会長に会うと、「池田先生のおかげです」とペコペコ、頭を下げていた。ところが、法主の座を手に入れた瞬間、態度を豹変させた。

日顕が昭和五十四年七月に登座した直後、東京・西片の大石寺出張所（当時）で、後に正信会となる若手僧侶の日顕への反発を池田名誉会長の責任になすりつけ、開口一番、挨拶の言葉もなく、こう言った。

「だいたい、あんたが偉すぎるんですな」

当時、若手僧侶たちが「僧俗差別」を唱えて、創価学会、なかんずく池田名誉会長を批判していた。彼らの主張は自分たちの立場を守ろうとする論理ではない。

この「偉すぎる」という言葉が出てきた理由は何か？ 要するに日顕も同じように「信徒差別」の考えを持っていたということだ。この言葉こそ、日顕の本音であり、僧侶の自分よりも信徒の池田名誉会長が内外から尊敬を集めていることに対してのやっかみなのだ。

●「コンプレックス」から、常に権威を見せつけようとする日顕

日顕はそれ以降も、何度も池田名誉会長に自分の権威を見せつけようとした。昭和五十七年三月、大阪で行なわれた関西青年平和文化祭に、日顕は招待されて出席した。そして文化祭終了後、本山に戻るやいなや、日顕は、関西でまだ会員を激励中の名誉会長を「すぐ、登山せよ」と呼び付けた。

池田名誉会長は、すべての予定を変更して、本山に向かった。日顕が突然、池田名誉会長を呼びつけた理由は何か？ それは、文化祭の参加者に向かつて、池田名誉会長が「日顕上人猥下も終始、拍手を送ってくださいました。ありがとうございます」と挨拶したことに対してだった。日顕は鬼のような形相で怒り出した。

「どうして『御法主上人』と言わないのだ！」

一体、「上人猥下」と「御法主上人」にどれだけの違いがあるのか。それまで、日昇法主も日淳法主も、そして先代の日達法主も「上人猥下」と紹介されて怒ったことなど一度もなかった。日亨法主に至っては『しい』でいい』と言っていたほどである。

歴代法主の中で、日顕だけが異常であったということだ。しかも、それだけのことで、大阪で会員を激励中だった池田名誉会長を本山にまで呼びつけるとは、非常識以外のなにもでもない。つまり、日顕はわざと池田名誉会長を本山に呼びつけて、〃自分のほうが上である〃と、「優越感」に浸ろうとしたのだ。これは日顕が池田名誉会長に「劣等感」を抱いている証拠である。「劣等感」と「嫉妬」は同根である。「劣等感」があるため、自分より優れた人間に対して「嫉妬」するのである。

だから、日顕は、池田名誉会長の海外での活躍を聞くと、決まって機嫌が悪くなった。昭和六十一年九月、池田名誉会長が元・米國務長官のキッシンジャー博士に会うことを、日顕に報告をした際、

「キッシンジャーとは誰ですか」

と嫌味を言った。そこにも、俗の人間よりも自分のほうが偉いという思い上がりから、優越感に浸ろうとする歪んだ日顕の性格を見ることができるといえる。

●池田名誉会長が自分よりも上であることが「許されるのか！」と激怒した日顕

宗門は今回の宗門事件の原因について、あたかも創価学会側に問題があるかのように宣伝しているが、誰よりも日顕自身が、自分の「嫉妬」が、宗門事件の原因であることを白状している。平成三年十一月二日、岡崎雄毅住職が本山・大奥で日顕と対面した。その際に、日顕は、右手の拳骨を出して「いいか、これが池田だ」、左手の拳骨を出して「これがワシだ」と言いながら、右手を上にして次のように怒鳴り散らした。

「今、こういう状態（筆者注 自分よりも池田名誉会長が上）になっているのだ。これでいいのか！これが許されるのか！」

日顕自ら、池田名誉会長に対する醜い嫉妬の姿をさらけ出した瞬間であった。

日顕はただただ、「自分よりも池田名誉会長が上」ということが許せないだけなのだ。だから、「C作戦」を行い、自分が頂点となる組織を再構築しようとしたのである。

## 六、宗門の根深い僧俗差別義を肥大化させた日顕

### ● 教学部長時代から池田会長の功績を否定していた日顕

昭和三十五年、「富士年表作成委員会」が発足し、日顕は委員に選ばれた。当時、同じく委員であった改革同盟の渡辺慈济住職の証言によると、日顕は、池田会長（当時）の功績を残すことを拒んでいたという。

日顕は翌昭和三十六年には教学部長に任命され、同委員会で幅を利かせるようになっていた。

ある日、下巻を検討していたときのことである。

渡辺慈济氏が「池田先生の名前を『池田会長○○寺を建立寄進』というように、年表に残すべきだ」と主張した。

すると、日顕が急に不機嫌になり、「いや、そんな必要はない」と理由もなく反対したという。

そして日顕は「学会事項に関してはそんなに力を入れなくていいんだ」と言い、その結果、草稿の段階では「池田会長」と記載されていた箇所が、昭和四十四年に刊行された完成本では、「学会」と変えられてしまっていたのである。

日顕の信徒蔑視の考え方は一貫している。どんな立派な功績でも、在家というだけで認めようとしていない。だから、在家の池田会長の名前を宗史に残すことなど許せなかったのだ。

### ● 江戸時代から時間が止まっている宗門

日顕は学会を破門した後、次のように述べている。

「近年において創価学会が現れ、信者だけの組織による仏法流布が試みられました」（平成五年一月 西九州親教）

この日顕の「信者だけの組織」という表現に、信徒蔑視・嫌悪が如実に現れている。

また、日顕は平成三年一月二日、秋谷会長（当時）が会見を申し出た時に、「お目通り適わぬ身」という表現を使っている。

「目通り」とは「身分が高い人に会うこと。謁見」を意味する。たとえば江戸時代に大名や旗本が將軍に謁見する際に使われた言葉でもある。また、江戸時代の武士には、どの藩でも藩主に目通りするのに資格が必要であった。それが「上士」と「下士」の区別であった。

宗門が今でもこのような言葉を使っているのは、まさに檀家制度の弊害である僧俗差別が身に染み付いているからである。大聖人が、どんな立場・地位の弟子に対しても、全魂込めて激励された姿とは正反対である。

### ● 学会員は住職の家族やペットよりも下

「檀家制度」の一番の弊害は、僧俗差別が制度化されてしまったことである。

檀家制度では、檀家は寺請証文の発行を拒否されると、人別帳に記載されない「帳外れ」と差別される。これは村八分よりも過酷な処罰で、社会的な抹殺を意味した。ゆえに、住職の権限は絶大となり、檀徒はひたすら隷属するしかなかった。たとえ檀家総代であっても、もし寺の行事に参加しなければ、戸籍を抹消されることもあった。

檀家制度の中で、僧侶は絶大な権力を手に入れ、信徒を支配下に置いた。そして同時に、僧俗の主従関係は制度として定着してしまった。

宗門の僧俗差別もこの檀家制度から生まれたものといえるが、宗門にはさらに別のヒエラルキ―が存在している。

一番偉いのは法主。次が法主の女房。そしてその次が一般僧侶であり、その次に来るのがその僧侶の女房となる。

宗門には僧階というランクがあるが、その僧階によって僧侶の地位だけでなく、女房の地位も変わる。僧階が下の僧侶は、僧階が上の僧侶だけでなく、その女房にも頭を下げねばならない。

末寺に行くとき、住職が一番上で次が女房である。女房は「ファーストレディ」として、その地域の信徒に丁重に扱われるべき存在であるとされた。そしてその次が、住職の子供であり、さらにペットがいれば、そのペットよりも下に位置するのが信徒となる。創価学会のどんな幹部であっても、住職の家族である「寺族」やペットより下の扱いとなるのだ。

#### ●出家しても、在家出身者は差別される

僧俗の差別はここで終わらない。今度は、僧侶の中で、寺族出身者と在家出身者で差別される。たとえば、日頭は在家出身の僧侶について「血が半分濁っている」という言い方をする。日頭からすれば、僧侶の子供は純血であり信用できるが、在家出身は純血でないから信用できないということになる。

そういう意味では、日頭は六十世・日開の子供であるからエリートの中のエリート、サラブレッドとなる。法主の子が法主になったのは日頭が初めてであるから、日頭は自分が特別な存在であると思っている。

しかし、僧侶の子がエリートであるという根拠は何もない。それどころか、この考え方は仏教の歴史から言えば、〃異端〃になる。なぜなら、僧侶に子供がいるのは、僧侶の妻帯によって生じたもので、百年前まで僧侶は妻帯していないから、僧侶に子供などいなかった。ましてや法主の子供が法主になるということなど、起こるはずがない。世界的に見ても、僧侶の妻帯は日本独自の慣習であり、日本の僧侶は、妻帯している限り「出家」とはいえない。

#### ●小僧でも、池田名誉会長より上と教えていた本山

日頭の代になり、日達法主の時代に比べて、格段に僧俗差別が強調されるようになった。それは、間違いなく、日頭が作り出した風潮である。

本山では露骨に僧俗差別が語られるようになった。たとえば、得度した中学一年生の子供に、本山の僧侶たちは

「お前たちは今日から、信徒より上になる。池田名誉会長でさえ、お前たちの下なのだ」

と教えはじめた。

また、一般得度者が池田名誉会長の著作を持っていけば、「在家の書いた本など読む必要は無い」と言われた。

#### ●信心にも僧俗差別。「三十分以上の唱題は弊害がある」と指導した日頭

この僧俗差別は信心の中にも持ち込まれ、〃唱題や折伏をするのは在家の仕事である〃と言う住職たちが増えた。本山の六壺で唱題をすると、先輩僧侶から〃学会員みたいなことをするな〃と言われた。

そして、本山で唱題している小僧がいると聞いた日頭は、所化の指導会で唱題についてこう指導した。

「三十分ぐらい真剣に行くことはよいと思うのであります。しかし、それ以上は、多すぎる事になってもおかえて弊害があります」(昭和五十九年八月 行学講習会)

この日頭の指導があつて以来、末寺などで唱題していると、住職から「お前は狛下の指南に従えないのか」と責められた。

また、宗門事件の頃に、本山で唱題していると「あいつは怪しい」「学会寄りだ」とか、「唱題している奴に氣をつけろ」などと言われた。

今の宗門では、末寺住職たちが盛んに「唱題が大事」と言っているが、それはあくまでも、創価学会に対抗するために信徒を煽っているに過ぎない。彼らは本心では、唱題など、未熟者の在家がすることだ〃と考えているのだ。

## 七、僧俗差別は人間の可能性を矮小化し、僧侶の墮落の原因となった

### ●〃信徒をかましてやれ〃と言ひ、民衆を「ボンクラ」と見下す日頭

宗門事件以降、日頭は公の場で、感情的な僧俗差別の発言を繰り返している。

平成三年八月二十九日の教師指導会で、ある末寺住職が「(今回の問題で)この信心が嫌になつてきた」という檀徒の声があると云つて、その檀徒への指導の仕方を質問した。すると日頭は声を荒げてこう答えた。

「信心がイヤになるうが、何しようがそんなことは関係ないんだ！ 君にとつては！ そんなこと、そんなくだらないことを言つておつてはだめだつてことを、頭から少しかましてやればいいんだ、そんな者に対しては」

その他にも以下のような発言がある。

「仏智というものは、一般民衆が分かるはずがないんですから。したがつて数から言うならば、ボンクラどもが千人万人おるよりも、仏様一人のお考えの方が正しいんです」(平成四年五月二十八日、寺族同心会)

「あのねー、ミーチャンハーチャンに分かるようにペコペコよ、頭下げて説いてたらよ、本当の法なんて説けやしないんだ」(平成六年八月二十四日、全国教師講習会)

このように、日頭は信徒に対して「かましてやれ」と言ひ、民衆を「ボンクラ」とか「ミーチャンハーチャン」という言葉で蔑んでいた。この日頭の言葉の中に、〃信徒は黙つて僧侶に従つていればよい〃という、僧俗差別の感情が滲み出ている。

### ●「有智は僧侶、無智は在家である」と説法する日頭

日頭が主張する「僧が上、信徒が下」という差別は、信徒の力を封じ込めて、信徒支配を容易にするための「装置」である。この装置があれば、どんなに墮落した僧侶でも信徒の上に立つ

ことができる。

しかし、その差別の恐ろしさは、単に僧侶の権威を生み出すだけでなく、仏性を内在している一人の人間の可能性を矮小化することにある。

現に、日顕は昭和六十三年の元旦勤行で次のように、**〃有智は僧侶、無智とは在家である〃**と発言している。

「『有智』とは仏教の色々な筋道を悟り学んでおるところの僧侶という立場であります。また『無智』とは仏の教えをほとんど勉強もせず、知らないで、世間の道において生活をしておる在家の人々をいうのでありまして」

本来、「有智」は仏法に通達し解了している者を指し、「無智」は仏法に通達していない者のことで、単純に僧俗で分けるものではない。

日蓮大聖人は「有智は舍利弗・無智は須利槃特」（御書三九八頁）と一例をあげている。

日顕が使う「僧俗一致」という言葉には、常に**〃無智な在家が、有智の僧侶に供養する〃**という意味が込められている。

すなわち、信徒はどのような偉大な可能性を持っていても、僧侶を超えることはできない。その一方で、僧侶はどんなにその行体がふしだらであっても、袈裟・衣を着ているだけで信徒よりも上になるのだ。

### ● 「凡夫即極」の教えに背き、衆生の「仏界」を踏みにじる日顕

そもそも、仏法の歴史は人間の尊厳を踏みにじる差別的な迷信との闘争の歴史とも言える。釈尊の敵は当時の「生まれ」による差別であり、たとえ生まれ変わってもその差別を逃れることができないという固定された「輪廻」の迷信であった。

釈尊は「生れを問うことなかれ。行いを問え」と説き、その結果、差別的な迷信を打ち破ったのである。

そして日蓮大聖人は次のように説いた。

「釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり」（御書一三五八頁）

この御文の意味は、〃釈迦仏が我ら衆生を成仏に導くために主師親の三徳を具えられていると思っていたが、そうではない。反対に、**仏に三徳を被らせているのは凡夫である。すなわち、仏の偉大な徳も、凡夫がいればこそ輝くのだ**〃という意味である。

まさに、「権威のための宗教」を「人間のための宗教」に一大転換させた、大聖人の大師子吼である。

ところが、今の宗門は釈尊や大聖人が戦っていた相手、大聖人を迫害していた側と同じ教えを説いている。彼らは衣の権威で、衆生が平等に具えている「仏界」という生命の尊厳を踏みにじているのだ。



### ●僧侶の墮落の温床となった「僧俗差別」

「僧俗差別」という装置は僧侶自身をも蝕む。なぜなら、大聖人の弟子として、自分を成長させるために修行する、という意欲を奪うからだ。

さらに悪いことに、その装置のおかげで、たとえ修行を怠ったとしても、供養だけは入って来る。その先にあるのは、僧侶の墮落である。法主ファミリーは高級旅館・料亭に足繁く通い、末寺の住職たちは夜な夜な繁華街に繰り出していた。

日頭は平成六年五月二十六日の全国教師寺族指導会で次のように話している。

「彼らは、ジーツと御供養して信仰やって、坊さんが墮落するのを待ってたんです！ これは、そう言えるんです。そうして、最後に墮落しきったところで、我々が宗門全部を利用して適当に料理しよう。うん。いこう。これが、いままでの彼らの本心ですよ」

信徒が真心で供養したお金を掠め盗って放蕩三昧しておきながら、我が身の罪を篤信の信徒になすりつけるのは、信じがたい屁理屈だ。供養した信徒が悪いのか、供養を遊興に使って墮落した僧侶が悪いのか、善悪は子供でもわかる。僧侶として、否、人間として情けない話である。

歴史を振り返ると、僧侶の墮落の温床となったのも檀家制度だといえる。

檀家制度の中、僧侶たちは、寺院を維持するために、葬儀の執行だけでなく、年忌法要や塔婆供養、盆と彼岸の墓参りを檀家に強要した。僧侶は、法要のたびに信徒から供養を受け、裕福になった。檀家制度の実態は、僧侶による信徒からの搾取である。

問題は、今の宗門がそのような檀家制度の悪弊を省みることなく、相変わらず、何の感謝もなく、信徒から搾取し続けていることだ。

法要だけでなく、信徒は寺を参詣するのに、手ぶらでは行けない。必ず供養をしなければならぬ。最近では、それ以外にも信徒の家を訪問して法を説く「宅御講」を奨励し、供養をさせている。僧侶自ら出向いて、供養をせびるのだ。彼らにとって、信徒は、供養を搾取する対象ではない。

### ●宗門の折伏は供養させる信徒を増やすため。だから成果が出ない

この「檀家制度」により、僧侶たちは布教する情熱を失っていった。布教しなくても、一定の檀家がいれば、葬儀や法要などの供養で生活ができる。僧侶たちは布教を捨てて、安定した生活を望んでいったのだ。

そういう意味では、「檀家制度」は麻薬である。布教をして難に遭うよりも、儀式を執行して供養をもらうほうが楽に決まっている。一度、その蜜の味を知った者は宗教的使命や情熱を忘れて、怠惰な生活を送るのだ。

その結果、どうなるか。今の宗門がその良い例で、布教が出来なくなる。いくら号令をかけても、僧侶自身が宗教的情熱を失っているからだ。彼らにとつて布教は、供養する信徒の確保ではない。だから、慈悲というものがなく、人の心を動かすことができない。いくら口先できれいな事を並べても、供養にしか興味がないという本音は、必ず信徒に見透かされてしまう。だから、信徒は自分たちが僧侶に利用されていると薄々感じてしまい、布教に真剣に取り組むことができず、成果が出ないのである。

### ●「創価学会の折伏はワシが許可してやったんだ」と言った日頭

日顕は青年得度者を前にして次のように言った。

「世界広布、世界広布というが、ワシがみんな許可してやったんじゃないか。それを自分がやったみたいに言っている」

日顕は自分たちが折伏をしない言い訳を「折伏は在家がやることだ」と言い、その一方で、創価学会の折伏の偉業は「自分が許可したからだ」と言う。まったく馬鹿げた言い草だ。

僧俗差別はここまで信心を狂わせてしまう。今の宗門には「不自惜身命」の大聖人の精神はひとかけられないのだ。

## 八、仏法史上、類のない日顕の大罪

### ●創価学会の破門は、世界的規模の暴挙

日顕は日達法主への「逆恨み」と、池田名誉会長への「嫉妬」から「C作戦」を実行し、世界一千万人の創価学会員を破門にした。

「破門」は、いわば宗教的な「死刑判決」である。創価学会を破門にすることは、日顕が全世界一千万信徒に宗教的死刑を言い渡したことになる。仏教、否、全宗教の歴史を見ても類のない、世界的規模の暴挙であった。

第二次世界大戦中、アドルフ・ヒトラー率いるナチス政権はユダヤ人に「劣等人種」のレッテルを張り、差別した。その時、彼らが利用したのが、フランスの外交官であったゴビノーが書いた『人種不平等論』だった。ナチス政権は、この書をユダヤ人への差別と迫害を正当化するための「バイブル」として利用した。そして「民族浄化」の名のもとに、単なる差別から、六百万人の大虐殺へとエスカレートしたのである。

日顕らも同じである。「僧俗師弟義」なる邪義で、僧俗差別を正当化して、最後には宗教的權威を振りかざして、仏界という尊極の生命を持っている信徒、一千万人の尊厳を踏みにじったのである。

### ●多額な経済的損害をもたらし、会社役員を自殺に追い込んだ「月例登山の廃止」

「C作戦」の中に、「C作戦遂行に際して考えなければならない事項」という項目があり、その中に次のような記述がある。

信心の弱い学会員、理性によって判断できない類いの学会員の中には、ノイローゼ状態に陥り、自殺・一家心中等の不幸が起きる可能性がある。また、この種の事件の報道等により、一般社会人に、宗門と学会の宗教抗争に対する疑問・不審と怒りが生ずる。

彼らはこのように学会員の中に犠牲者が出ることまで想定していたのだ。何と無慈悲で冷酷な者たちか。僧侶にあるまじき行為だ。

実際に、この「C作戦」実施により、自殺者が出ている。

平成三年、日顕らは「C作戦」の一環として、長年行なわれてきた月例登山を廃止して、所属寺院の証明を必要とする「添書登山」を強行した。大御本尊を利用して、創価学会から会員を掠め盗ろうとしたのだ。

その結果、登山者の激減によって、地元の民宿やホテルなどが経済的被害を受けたが、中でも

輸送関連会社の経済的損失は深刻であった。

本来なら、そのような大幅な改正を行なう場合は、その改正による社会的・経済的影響を考慮しなければならぬ。

事実、JRは既に年間ダイヤを組んでいたし、ある海運会社は沖縄、九州、四国からの登山会専用船舶を約三十億円かけて建造したばかりだった。

また、バス輸送の「大富士開発」にとって、月例登山会の中止は、死活問題となった。この「大富士開発」は昭和三十四年に設立され、発起人には日達法主も名を連ねている。

同社幹部が大石寺に、「月例登山」の廃止を見直すように陳情しても、大石寺側は応対すらせず、一方的に添書登山を実施した。

その結果、同社は平成三年五月に事業閉鎖を決定し、社員の解雇問題などに追われるなか、同社副社長が、「皆様に迷惑をかける」と責任を感じて、平成三年六月に自殺したのだ。大石寺の無謀な行為が、一人の人間を死に追い込んだのである。

### ● 本山の観光地化を阻止するために始まった「登山会」

そもそも、月例登山は戸田第二代会長が、大石寺の経済的援助を含めて提案し、昭和二十七年十月に開始された。

当時、大石寺は経済的に困窮し、そのままでは、本山の運営が難しい状態であった。その打開策として、大石寺は富士宮市や観光協会と話し合い、本山の観光地化を進めていたのである。

そのことを知った戸田会長は、大石寺が他宗のように宗教を売り物にする観光地となることを恐れて、創価学会が月例登山を行い、その供養で本山運営が賄えるようにしたのだ。戸田会長の英断により、大石寺は経済的に救われただけでなく、その信仰を守ることができたのである。その大恩を日頭は仇で返して、自殺者を生むという社会的問題を引き起こしたのである。宗教者として、その責任は重い。

### ● 創価学会破門は、「破和合」の大罪、墮地獄の因

また、未曾有の世界布教を進めてきた、広宣流布の教団である創価学会を破門することは、仏法の五逆罪の一つである「破和合僧」である。広宣流布を妨害する、その悪行は墮地獄の因であると説かれている。

実は日頭はそのことを自覚していた。先述した、平成三年十一月の岡崎住職との対面の際に、日頭は池田名誉会長が自分より上であることに「これが許されるのか！」と激怒したが、その後、うす笑いを浮かべて、こう述べた。

「地獄に墮ちるならワシが一番先だ」

すなわち、日頭は池田名誉会長をカットして、創価学会の師弟を分断する行為が、「破和合」の罪であるとしながら、自分のプライドを満足させることを優先させようとしたのである。異常なまでの嫉妬心である。

### ● 正本堂破壊は、供養した人々の真心を抹殺する蛮行

仏法史上、類のない日頭の大罪は、これだけではない。

平成十年四月五日、客殿の落慶法要の際、突然、日頭は正本堂解体の発表を行い、六月二十三日、五十億円をつぎこんで、正本堂の解体を開始した。

正本堂は昭和四十七年、世界八百万信徒と僧侶・寺族の供養で建てられた。当時、集められた供養は約三百五十五億円である。

鶴が羽ばたくイメージで設計された正本堂の素晴らしい威容は、今までにない宗教建築として、「日本建築学会賞作品賞」を受賞したが、海外からも数々の賞讃を受けてきた。昭和四十八年に欧米環境設計協会から表彰され、また同年にアメリカ建築家協会からも表彰盾と賛辞が贈られている。そして、その翌年の昭和四十九年には、アジア・西太平洋建設業協会国際連盟から「金メダル賞」を受賞している。

その歴史的な宗教建築を日顕は、突然破壊すると言い出したのだ。

この暴挙に対して、設計者の横山氏や多くの建築家が反対の声をあげたが、日顕はそれらの声を無視し、解体を強行した。

当初、正本堂解体の理由として宗門側は「老朽化」をあげていたが、専門家は「正本堂の耐用年数は千年」と説明している。

結局、日顕自身が

「この正本堂の存在が謗法の固まりと言ってもよいような意味に変わってきたのであります」  
(平成十二年一月一日、元旦勤行)

と、〃謗法の固まりだから壊した〃と発言し、「老朽化」はただの言い訳であったことが暴露された。

世界の文化遺産ともいえる世紀の宗教建築を「謗法」だから壊すという宗教が果たして、世界宗教として通用するのであろうか。

海外の建築専門家は

「二十世紀の平穏な国で、このような破壊を行うことはバカげている」

「宗教の保守主義による最も偏狭な出来事」

「正本堂の解体は、人類の建築史に空白を作り出すことになる。今世紀最大の損失」

と、日顕の狂信的な行為を批判している。

信徒が寄進した建物をいとも簡単に破壊する。このような宗教が世界の民衆を救えるはずがない。なぜなら、そのような行為は苦勞して供養した人々の真心を抹殺するものだからだ。

宗祖大聖人は、信徒からの真心の御供養に対して、常にその赤誠の志を褒め称え、その信徒の状況に即して、大慈大悲の力強い激励をされている。

「松野殿御返事」には

「民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが如くなる・ふるさきを仏・法華経にまいらせ給へる女人の成仏得道・疑うべしや」(御書一三九〇頁)

とまで仰せである。すなわち、大聖人は、供養された白米は単なる白米ではなく「民のほねをくだける」思いの結晶であり、お酒も「人の血をしぼれるが如くなる」尊いものであると、その勞を最大にねぎらわれているのである。そして、その赤心の志により必ずや成仏は間違いないと断言されている。

正本堂は、まさしく「民のほねと血」で建立されたものである。自分たちの都合で何一つ根拠なく、ただ「謗法」呼ばわりするだけで、「民のほねと血」の結晶を破壊する日顕を大聖人が許されるはずがない。

### ●日頭のシアトル裁判出廷時期と符合する正本堂解体の発表

「正本堂破壊」に関して、一つの疑問がある。それは、なぜ、この時期だったのかということだ。創価学会破門からすでに約七年過ぎており、非常に唐突な発表であった。この時期に日頭は何があったのかと調べると、以下の事実が出てくる。

この正本堂破壊の発表の三ヶ月半前、平成九年十二月二十二日、日頭はアメリカでの買春疑惑、通称シアトル事件の裁判に初出廷している。そして、二回目の出廷は平成十年二月二日、三回目は同年五月十八日であった。

宗内では、日頭は自分が裁判に出廷するとは予想してなかったのではないかと言う僧侶もいる。日頭側の弁護士も日頭に出廷する必要はないと説明していたという噂もある。だから、出廷が決まって怒った日頭はその弁護士を解任したという。

当初、日頭は買春疑惑の夜の行動について、「ホテルから一歩も出ていない」と主張してきたが、平成七年九月に、「飲酒のために外出した」と証言を変えている。したがって、日頭が出廷した際に、〃外出して何をしたのか〃ということが大きな争点になった。

裁判所では法主の権威は通用しない。相手方の弁護士から「阿部さん」と呼ばれ、その時の自分の行動について根掘り葉掘り聞かれた。おそらく、日頭にとって、これほどの屈辱はなかっただろう。

ある僧侶は、日頭が裁判に出廷した時期に正本堂破壊の発表をしたことについて、「裁判から信徒の目をそらすためとも考えられるが、裁判で屈辱を受けた報復として、創価学会の会員に自分の力を見せつけようとしたのではないか」と述べている。

### ●自分の都合で簡単に前言を翻す、無責任な日頭

そもそも、正本堂は、日達前法主が、

「正本堂は、一期弘法付嘱書並びに三大秘法抄の意義を含む現時における事の戒壇なり。即ち正本堂は広宣流布の暁に、本門寺の戒壇たるべき大殿堂なり」（昭和四十七年四月二十八日、「訓諭」）

と、仏法上の意義を明らかにされ、全世界の八百万信徒の赤誠の御供養により建築された二十世紀最大の宗教建築であった。

日頭自身もかつては、

「さて先師日達上人が、大御本尊安置のこの大殿堂を正本堂と命名せられたことは、宗祖大聖人、日興上人以来の血脉法水を通して、甚深の意義を熟慮あそばされたからにほかなりません」（昭和五十七年十月十二日、正本堂建立十周年記念総登山）

と正本堂の意義について賛嘆していた。

僧侶であれば、一度、自分が発した言葉に対して、責任を持つべきである。しかし、日頭は自分の都合にあわせて簡単に前言を翻す。責任感がなく、誠意のひとかけらもない。人間として恥ずべき行為を平然と行なうのが日頭である。

また、日頭は池田名誉会長の総講師解任を決めた約三ヶ月前、十月七日の、開創七百年慶讃大法要の初会で、池田名誉会長を讃える「慶讃文」を読み上げたが、その中にも

正本堂ハ有縁信徒千万ノ懺悔滅罪ノ大堂タリ洵ニソノ功德重且ツ大ナリト云フヘシ

という正本堂の意義を讃える文が出てくる。

ここでも日頭の謀略性が現れている。日頭はすでにこの時期には「C作戦」を謀議していた。それにもかかわらず、わざわざ池田名誉会長の功績と正本堂の意義を讃えていたのだ。

### ●池田名誉会長の「慢心」をでっち上げた正本堂説法は訂正

日頭は、正本堂を破壊した理由を

「あの正本堂を解体したのは、凡夫であり下衆の人間であるところの池田大作が、宗祖大聖人の境界を乗り越えようとするような大それた野望と悪念を持っており、その大謗法の塊として正本堂が建立されたことがはつきりと判ってきたからであります」（平成十五年一月一日、元旦勤行）

と言っているが、これは何の根拠もない、まさに言いがかりである。

まず、宗門は池田名誉会長の総講師の地位を罷免したが、「解任でも処分でもない」とマスコミに発表した。ということは、この時点でも池田名誉会長には非がないということになる。

ところが、その後、日頭は池田名誉会長の総講師罷免は「制裁」であったといい始める。では池田名誉会長と創価学会のどこに非があるのか？

日頭は、創価学会が「お尋ね」に対する回答をせずに九項目の質問をしてきたことに對して「このような形は、全く反省の色もなければ、誠意もない」とか「信仰の念がほとんど認められない姿で宗門に対してはつきりと反抗してくる、文書を送りつけてくる」と創価学会を批判し始めた。すなわち、日頭の言い分は「お尋ね」の内容とは関係なく、〃信徒の分際で僧侶に質問してきたこと自体が「制裁」の対象になる〃ということになる。

日頭が言うところの「謗法」は、在家が僧侶を越えることである。

また、日頭は平成三年一月六日、十日の教師指導会での説法で、池田名誉会長が、昭和四十三年十月の正本堂着工大法要における挨拶で、「三大秘法抄」の「靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて」以下の御文をあげて「法華本門の戒壇たる正本堂」と述べたことが「慢心」である、と決めた。

つまり、それ以前に宗内ではだれも言っていないのに、名誉会長が一信徒の分際で正本堂を御遺命の戒壇と断定したことが大きな問題であり、そのような「慢心」が、今日、宗門と学会の問題が起こった根源であると言ったのである。

しかし、これは、日頭の完全な〃思い違い〃であった。

実際には、昭和四十年二月の第一回正本堂建設委員会で、日達法主が一期弘法抄を引いて正本堂が広布の暁に本門寺の戒壇となる意義をもつ建物であると指南している。

結局、この日頭の説法の誤りについて、『大日蓮』（平成三年二月号）に二つの訂正が掲載された。一つは、「昭和四十三年十月以前に、正本堂につき『三大秘法抄』『一期弘法抄』の御文意を挙げての日達上人のお言葉があったので訂正する」というもので、もう一つは、〃正本堂を三大秘法抄等の御遺命の戒壇と関連させた発言をしたのは、名誉会長が一番初めではなかったので訂正する〃というものであった。

これでは、日頭の説法そのものが成り立たず、池田名誉会長批判の根拠は完全に崩壊したことになる。

日頭が池田名誉会長を批判する理由は、コロコロ変わる。なぜなら、「先に処分ありき」で、「池田追放」が目的であるからだ。理由は何でもよい。あとからつけるだけだ。とにかく日頭は、在家の池田名誉会長が自分よりも信徒から尊敬され、世界から評価されていることが気に食わないのだ。

●日達法主の時代を象徴する正本堂が目障りだった日顕

日顕からすると、正本堂は池田名誉会長の広宣流布への功績の象徴であると共に、日達法主が創価学会と協調していたという証でもある。僧俗差別の考えに染まっている日顕は、在家の功績など称える必要はないと思っている。そして何よりも、在家の活躍を認めた日達法主が許せないのだ。だから、日顕は日達法主の時代を象徴する正本堂が目障りだったのだ。

それにしても、日顕の言い分は筋が通らない。正本堂という建物が謗法ならば、その土地も学会の寄進であるのだから、現在の奉安堂は謗法の地に建っていることになるではないか。

創価学会は、正本堂の他にも、大講堂、総坊など大石寺の様々な建物、また全国の約三百五十の末寺等を寄進しているが、日顕の理屈で言えば、それらも謗法であり、即刻破壊すべきである。

宗門は「いや、正本堂とその他の建物では意味が違う」などと言っているが、実に身勝手な理屈である。彼らの本音は〃正本堂はいらないが、坊主の寝床は必要だ〃ということだ。

●世界が驚いた正本堂破壊。「寺院破壊」はテロ行為

この正本堂破壊のニュースは、世界中の信徒に衝撃を与えた。特に、大変な生活の中、純粹な信仰から建設供養に参加した海外の多くの檀徒が、〃絶対に許されない蛮行だ〃と怒りの声をあげて、脱講している。

また、正本堂破壊は多くの国で、宗派を超えて大きな話題になった。たとえば、仏教国のスリランカの新聞で報道された時には、スリランカの仏教徒にとって、信じ難い事件として受け止められた。なぜなら、スリランカでは寺院を破壊するのは、テロ行為であるからだ。僧侶は身を挺して、その行為から寺院を守らなければならない。ところが、日顕は僧侶でありながら、自分の宗派の宗教建築を破壊したのである。

スリランカの人々は

「自分の宗派の寺院を破壊した僧侶など、仏法史上、存在しない。日顕は魔僧だ」

と痛烈に批判した。

●正本堂の解体をモニターで見て、喜んでいた日顕の異常性

「日顕は魔僧だ」というのは、決して大げさではない。

日顕は、御影堂の杉木立ちの中に解体現場に向けたカメラをセットし、正本堂が壊される様子を大奥のモニター画面で見て喜んでいたという。

広宣流布という大善行のために建てられた世紀の大殿堂が解体される様子を見て喜ぶ。これこそ、魔の姿である。

九、法主の座を盗み、宗門衰退の原因を作った日顕

●自分の野望を実現するために、名乗り出て法主になった日顕

昭和五十四年七月二十二日午前五時、富士宮市の病院で日達法主が逝去した。その後、本山にて身内、関係者による読経が行なわれ、その直後、遺族の細井珪道、琢道、そして日達法主の娘婿の菅野慈雲等、数人が話をしているところに、枕経の導師をすることになっていた当時の阿部総監（日顕）が話しかけてきた。

「あとのこと、君たち聞いてるか？」

あきらかに相承についてのことである。そこで菅野慈雲が、答えた。

「いやあ、それは総監さん（日顕）じゃないですか？」

その瞬間、日顕はつぶやいた。

「あつ、そうか：ああ、そうだったな——」

そして日顕は複雑な表情をしたまま、考え込むような格好でゆっくりとうなずいたという。

後に日顕が主張するように一年前に相承を受けているというなら、なぜ「あとのこと、君たち聞いてるか？」と遺族に尋ねる必要があるのか。

そして午前十一時、緊急重役会議が開かれた。出席者は総監の日顕、重役の椎名法英（日澄）、そして早瀬日慈の三人であった。

この席で日顕は突然、次のように言い出した。

「今日までどなたにも秘してきたが、実は昨年四月十五日、総本山大奥において猥下と自分と二人きりの場において、猥下より自分に対し、内々に御相承の儀に関するお言葉があり、これについての甚深の御法門の御指南を賜ったことを御披露する」

これが、六十七世法主が誕生した瞬間であり、日顕の「相承疑惑」の始まりである。問題は「自己申告」であるから、証人がいないということだ。

前述した通り、日達法主は亡くなる直前、対面所に床を敷くことを命じ、そこに娘婿の東京国立・大宣寺の菅野慈雲と当時の御仲居・光久諦頭を呼ぶように奥番に命じた。もし、日顕が内々に相承を受けたというなら、その場に呼ばれているはずである。しかし、実際には日顕は呼ばれていなかった。

また、昭和六十一年十月四日の「河辺メモ」に、日顕が昭和五十三年四月十五日に日達法主から内々に相承を受けたと言いつ出したことに対して、光久が

「四月十五日にしているのですか。あの日は達師が忙しい日だが」

と述べたことが記載されている。

その日は、日達法主の誕生日でかなり多忙であったため、相承を内付するという重大事が行なわれる余裕などなかったことを、光久は知っていたのである。

さらに、日顕自身が本山の複数の僧侶の前で

「早瀬日慈さんあたりが受けているのではないかとも思ったが、待っていても何も言い出さないので、自分から名乗って登座した」

と話している。



おそらく、この証言が日願の心情を一番、よく表しているに違いない。

日願は日達法主から、「これからは創価学会を外して考えるべきではない」と厳しく弾呵され、「寺院中心」の自分の理想を否定された。だから、いつかは自分の正しさを証明したいと心に秘していたに違いない。そして、そのチャンスが来た。

枕経をあげた時点でも、「自分が相承を受けた」と名乗り出る者はいない。日達法主の遺族に確認もした。〃今、自分が名乗りをあげれば、法主の地位が手に入る〃。日願は賭けに出たのだ。

結局、緊急重役会議で早瀬日慈は何も言わずに、日願が法主に就任した。早瀬日慈にしてみれば、後輩の日願が「是非、早瀬能化に」と推薦してくれるのではないかという期待があったのかもしれない。後年、早瀬日慈は、

「自分が我慢したから、阿部さんが法主になった」

と話している。

そして、日願はまんまと六十七世の地位につき、自分の野望である「寺院中心」の体制を築くために、「祖道の恢復」を掲げた。

### ●日達法主から信用されていないことに腹をたて、法主批判と大御本尊否定

日願の日達法主に対する恨みは深かった。そのことを証明したのが、平成十一年七月に宗内に流出した「河辺メモ」であった。そのメモには日願が陰で日達法主を非難していたことが書かれていたが、もう一つ、信じ難いことが書いてあった。それは日願が教学部長時代に、戒壇の大御本尊が偽物であると河辺に話したことである。

〈河辺メモ〉

S53・2・7、A面談 帝国H

#### 一、戒旦之御本尊之件

戒旦の御本尊のは偽物である。

種々方法の筆跡鑑定の結果解った。(字画判定)

多分は法道院から奉納した日禅授与の本尊の題目と花押を模写し、その他は時師か有師の頃の筆だ。

日禅授与の本尊に模写の形跡が残っている。

#### 一、Gは話にならない

人材登用、秩序回復等全て今後の宗門の事ではGでは不可能だ。

一、Gは学会と手を切っても又二三年したら元に戻るだらうと云う安易な考へを持っている

※日禅授与の本尊は、初めは北山にあったが北山の誰かが売に出し、それを応師が何処で発見して購入したもの。(弘安三年の御本尊)

(筆者注 Aは阿部、Gは猊下の略)

宗旨の根幹を〃偽物〃という日願の発言の発覚に、宗内は騒然となり、宗務院は慌てて「通達」を出した。この「通達」では、「外部からの疑いに対して説明したもの」と釈明しているが、当時、そんな疑いなどどこにも存在していなかった。

また何よりも、「日禪に授与された御本尊」と大御本尊を間近で鑑定できる者が外部にいるわけがない。それが可能なのは宗内でも限られており、二体の御本尊の照合を思いつき実行できるのは、以前から〃本尊鑑定の専門家〃を気取っていた日顕以外にはいない。

宗務院は、通達を出した翌日にも「河辺慈篤師からのお詫びと証言」という「通達」を出し、河辺に「メモは私の主観」であり、「記録ミス」と言わせていた。もし、河辺の「記録ミス」というのであれば、宗旨の根本中の根本である大御本尊のことでもあり、河辺に対しても「嚴重処分」をするとともに、どのように「記録ミス」をしたのかを明らかにするべきである。しかし日顕は、処分どころか、河辺を北海道・日正寺から東京・大願寺に「栄転」させており、「記録ミス」の内容には一切触れていない。

この衝撃的な日顕の〃大御本尊ニセモノ発言〃と並んで、メモに記されていたのが、日顕の日達法主批判であった。

宗門側は〃この発言は当時の正信会僧侶の言い分を書いたもの〃などと釈明しているが、無理のある説明だ。このメモは明らかに河辺が阿部（日顕）の発言を書いたものであり、普通に読めば、日顕が「Gは話にならない」と発言したことになる。

日顕は昭和五十三年四月十五日に日達法主から内々に相承を受けたと言い張っているが、このメモはその二ヶ月前のものだ。

おそらくその時点では、日顕は自分が法主になる可能性は低いと感じていたに違いない。だから、河辺に日達法主批判をぶったのだ。

また、日達法主が亡くなる半年前、昭和五十四年二月に、山口法興が日達法主に「狛下、ご相承を阿部さんにだけは渡さないで下さい」と直言し、日達法主は「よく分かってるよ。大丈夫だ」と答えたという話もある。

そのような状況で日達法主が日顕を後継者にするはずがない。

かつて、山崎と日達法主の弟子たちが騒ぎ出した時、ある日の目通りで日達法主の弟子たちが、相承のことを質問すると日顕は血相を変えて次のように言い放った。

「もし俺が相承を受けていないというのなら、誰が相承を受けたんだ」  
「俺が相承を受けてないというのだったら証拠を出せ」  
「俺は相承を受けたから、ここにいますんだ」

もし、日顕が相承を受けた証拠があるのなら、このような言い方にはならないだろう。この発言からも、他に名乗り出る者がいないから日顕が法主になったということが明らかである。

### ●いまだに相承の証拠を出せない日顕

相承疑惑を深めている原因は、他ならぬ日顕自身にある。なぜなら、いまだに相承を受けたことを証明できないからだ。そしてそれは裁判においても同じで、日顕は相承を受けた証拠を出せない。

宗門は正信会寺院に対して寺院明け渡しを求める提訴を何度も行ってきたが、そのたびに日顕が血脈相承を受けた正式な法主かどうかが焦点となった。しかし、裁判所は、阿部日顕が血脈相承を受けているかどうかを判断できず、これらの訴訟は「法律上の争訟」に当たらないので、そもそも訴訟そのものを裁判所が取り上げることはできないと判断した。

この日顕の相承疑惑は日顕が退座した後の裁判でも焦点となっている。平成二十年十二月、宗門は正信会の寺院三十四ヶ寺が、寺の看板などに「日蓮正宗」の名称を

使用していることに対して、名称使用の差し止め等を求めて提訴した。  
一審の審理の中で正信会側は、次のように主張した。

「原告代表者とされる早瀬日如は、詐称法主である阿部日顕から次期法主に選定された者であつて、原告の法主ではないから、管長ではなく、代表役員ではない。したがって、本件訴えは代表権のない者により提起されたものであるから、本件訴えは、訴訟要件を欠くものとして却下されるべきである」

これに対して、宗門側は「早瀬日如は適法に代表役員に選任されている」と反論したが、結局、ここでも、日達法主から日顕に相承があつたという証拠を何一つ示せぬまま、平成二十一年十二月十八日、東京地方裁判所は、日蓮正宗宗門側の訴えを退ける判決を下した。  
裁判所はその理由を次のように述べている。

「早瀬日如が原告の代表役員の地位にあるか否かを判断するには、結局、早瀬日如が法主の地位にあつたか否かを審理、判断する必要があるが、血脈相承の意義を明らかにした上で、同人が宗祖以来の唯授一人の血脈を相承したということができるか否かを審理しなければならぬことになる」として、信仰の教義や内容に立ち入って審理することが避けられないため、「本件訴えは不適法」である。

この一審の判決を不服とした宗門側は直ちに控訴したが、平成二十二年八月四日、東京高裁は一審判決を支持して、宗門側の訴えは「不適法」であるとして棄却された。  
自ら訴えた裁判で「不適法」と判決されたのだから、これ以上恥ずかしいことはない。

この先、何人、法主が誕生しても常に日顕の相承疑惑が焦点となり、日蓮正宗は「不適法」な教団となるのだ。

### ●相承疑惑により不安定な自分の立場を、「法主絶対」という己義で守ろうとした

自ら名乗り出て法主になった日顕は、立場が不安定である。だから日顕はことあるごとに、「俺は法主だ!」とわめいていた。それを見かねた山口法興が

「猥下、あまり『法主、法主』と言われたい方がいいですよ。人間は『俺は人間』とあまり言いませんから」

と進言して、日顕の怒りを買った話は有名である。

日顕が登座してからおよそ一年半後、山崎正友が週刊誌に「阿部日顕は正規の手続きによって相承されていない」という趣旨の手記を書き始めた。

そして、この手記を契機に日達法主の弟子たちが中心となった「正信会」が公に日顕批判をはじめ、昭和五十六年一月、正信会僧侶百八十四名が、静岡地裁富士支部に阿部日顕の「地位不存の確認並びに職務執行停止の仮処分申請書」を提出した。

その後、日顕は強権を発動し、彼らを擯斥処分にする。

この後も、「正信会」の日顕攻撃は続き、そのような中で、日顕を擁護するために、宗内に「法主絶対」という風潮が出来上がっていく。

そして、今の宗門は日顕を守るために日顕を「僧宝」と位置づけ、日顕を批判することは「僧宝破壊」、三宝一体であるから「三宝破壊」であるとしている。

しかし、「日蓮正宗宗規」でははっきりと「本宗は、大漫荼羅を法宝とし、宗祖日蓮大聖人を法宝とし、血脈付法の人日興上人を僧宝とする」と定められている。

また、日達法主は歴代法主の役割について次のように述べている。

「我が宗の三宝は、御本尊が法宝、大聖人が仏宝、日興上人が僧宝と立てます。それに対して日目上人は座主である。

今云った通り、管領して、その大聖人の仏法を治めていく、よく受取って治めて行く、即ち管領と云う意味を持って行くのである。統べ治める、そして統治をして行く。その日目上人の後は、皆筒の流れのように、それを受継いで行くにすぎない。」

(昭和五十二年五月二十六日 第十九回寺族同心会の砌)

このように、日達法主は日興上人と日目上人の立場の違いを明確にされている。歴代法主はこの日目上人の一分として三宝を守っていかねばならない。

それを表しているのが客殿の法主の座る位置である。法主は三宝の前には座らない。御本尊に向かつて左に座って東を向く。そこが日目上人の座になる。これは大聖人の客分を御本尊、三宝に通ず立場を表している。

ところが、今の宗門は日顕を守るために、法主を絶対の立場に変えてしまった。その結果、三宝義は都合の良いように改変された。今の宗門の教義で言えば、法主が信仰の対象になってしまい、文字通り「日顕宗」である。

第二次世界大戦後、世界はあらゆる分野で「民主化」が進み、日本の各宗派も、この数十年で教団の体制の民主化を進めている。具体的には、教義の裁定権を持つ「法主」と、宗内行政のトップである「管長」を分離し、宗議会の独自性が保障されているところも多い。

しかし、宗門の場合、法主が管長を兼ね、宗門における全権力を持っている。

また、日顕が登座するまでは宗会が法主の辞職勧告を決議することもできた。現に、大正十四年十一月二十日、宗会は五十八世日柱法主の不信任案を成立させ、辞職勧告を決議している。

ところが日顕は宗制宗規を変更し、宗会を無力化してしまった。今や、悪法主が出現しても、宗門には自浄する手立てがない。

### ●法主に対する合掌を徹底。権威で尊敬を強要した日顕

日顕の代になり、急に法主に対する合掌礼が徹底された。日顕を拝む—これこそ、日顕が本山の「日顕宗」の姿である。

本山の小僧は、たとえ、百メートル離れていても、日顕を見かけたら、その場でしゃがんで端座合掌をしなければならぬ。日顕の顔を見ることは禁じられており、少しでも顔をあげれば、日顕に「貴様！」と怒鳴られて、中啓で頭をたたかれる。

日達法主は丑寅勤行のあとに、小僧にお菓子分け与えたりするなど、決して権威的ではなかった。日昇法主は、小僧と相撲をとることもあったという。

では、なぜ、日顕はこのように権威にこだわるのか。それは日顕には、〃みんな、ワシは相承を受けていないと思っているに違いない〃という不安があるからだ。相承疑惑がなければ、権威で尊敬を強要しなくても、自然に周りの僧から尊敬される。しかし、日顕には、常に〃自分はニセ法主だと思われている〃という不安がある。だから、権威を振りかざして、その不安を取り除こうとするのだ。

●日達法主時代の建物を破壊することによって、相承疑惑を封じ込めようとした日顕

日顕は登座して以来、六壺、大化城、大客殿と次々に日達法主時代に建てられたものを破壊し始めた。

その理由は何か？ まず、自分を後継者として指名しなかった日達法主への報復である。日達法主時代の建物を破壊し、**日達師の匂いのするもの**をすべて消し去ろうとしたのである。

そして同時に、建物を破壊することによって、自分の力を見せつけ、宗内にくすぶる相承疑惑を封じこめようとしたのだ。日顕は権威を示すことでしか、自分の存在をアピールできないのだ。これは人間に対しても同じである。日顕は小僧が何か問題を起こすと、すぐに処分した。だから首切り日顕と揶揄されていた。日顕は僧侶を処分することによって、自分の力を見せつけようとしたのだ。

しかし、そう簡単に日顕の相承疑惑は消えない。それどころか、日達法主時代の建物を破壊したことにより、「相承を受けているなら、先師の功績を破壊するはずがない」と、かえって相承疑惑が深まったのだ。

●歴代会長を賛嘆していた先師に違背し、宗門の歴史を否定

近代の歴代法主は学会の出現意義を深く理解し、学会の功績を最大に賛嘆していた。まず、五十九世の日亨法主は以下のように学会の出現の意義を述べている。

「戸田さん、あなたがいなかったら日蓮正宗はつぶれたよ」「今の宗門から学会をとったら、何も残らない」

「学会は素晴らしい広宣流布の団体だ。それに比べれば、宗門や檀家は足元にも及ばない。学会を尊敬しなければいけない」

「御本尊様も本当に日の目を見たのは、学会が出現してからだ。学会のお陰で御本尊様の本当の力が出るようになったことは誠にありがたい。檀家が御本尊様を書いてもらいたいと頼みに来るが、私は、広宣流布のための御本尊様なら認めるが、御供養をいくら出すからいただきたいというのなら一切書かない」

また、六十五世の日淳法主は次のように、牧口初代会長を「生来仏の使であられた」と深い信頼を寄せ、戸田第二代会長の七十五万世帯の折伏達成の偉業を「妙法蓮華經の五字七字を七十五万として地上に呼び出した」と最大に賛辞を送られている。

「私は先生が、法華によつて初めて一変された先生でなく、生来仏の使であられた先生が、法華によつて開顕し、その面目を発揚なされたのだと、深く考へさせられるのであります。そうして先生の姿にいひしれぬ尊厳さを感じるのであります。先生には味方もありませんが、敵も多かつたのであります。あの荆の道を厳然と戦いぬかれた気魄、真正なるものへの忠実、私は自ら合掌せざるを得なくなります」(昭和二十二年十月十九日 東京教育会館 創価学会第二回總會御講演)

「御承知の通り法華經の靈山会において上行を上首として四大士があとに続き、そのあとに六万恒河沙の居士の方々が靈山会に集まつて、必ず末法に妙法蓮華經を弘通致しますという誓いをされたのでございます。その方々が今ここにでてこられることは、これはもう靈山会の約束でございます。その方々を会長先生が末法に先達になつて呼び出されたのが創価学会であると思ひま

す。即ち妙法蓮華經の五字七字を七十五万として地上に呼び出したのが会長先生だと思えます」  
(昭和三十三年五月三日 東京メモリアルホール 創価学会第十八回総会御講演)

そして、六十六世の日達法主は創価学会の出現の意義を称え、「法華講の眞の精神はいまの学会員にあるのであります」とまで言われている。

「大聖人様の三箇の鳳詔によっても、いまの時代に御本尊を護持し、付屬してあることあらしめておるのはだれでありますか。学会であります。また令法久住のために死身弘法をもって、仏法を守護し、戒壇の大御本尊様を護持し、そして折伏をしておるのは学会であります。また、あらゆる謗法の難を破折し、六難九易を身をもって行ない、末法の広宣布を実現しておるのも学会であります。

これこそ大聖人のおっしゃるところの法華講であります。法華講の眞の精神は、いまの学会員にあるのであります。かかるがゆえに私は、その学会の会長である池田先生を、法華講総講頭に依頼したのであります」(『大日蓮』昭和四十一年六月号)

また、日達法主は、昭和四十六年九月一日、東京の富士会館創立五周年記念法要で、池田名誉会長を「法華講の大指導者」と言い、池田名誉会長の出現は「仏意仏勅」であると賛嘆している。この富士会館は創価学会が法華講の拠点として寄進したものである。

「今、幸いに宗教の自由が許され、本当に民主的時代になった今日、ここに幸いにして、我々の法華講の大指導者が出現せられたのでございます。まことに今日この指導者が出たということは、おそらくこの時代に広宣布をさせんがために、仏さまがそうした、大聖人様がそうなされた、と推測するのでございます」

「私どもも本山において全面的に、この指導者に外護を依頼し、すべて信頼して、本山もますます盛んになり、本宗の各寺院も盛んになり、年々寺院も増加していく、ありがたい時代となったのでございます」

「この法華講総講頭という大指導者を得た今日、みな一致して、そして広宣布へ邁進して、大聖人様の御意を達成していただきたい」

このように近代の法主は、日蓮正宗の歴史において未曾有の折伏を達成した三代会長の功績をただならぬものと理解し、惜しみない賛辞を送っていた。ところが、日頭はその先師たちが認めた創価学会の出現の意義とその功績をすべて否定し、現代の檀家制度とも言える僧侶中心の体制に引き戻そうとしたのだ。

●歴史に残る宗門の汚点。大聖人、日興上人の精神に違背。信徒の供養で遊興し、供養された建物を壊す宗派など、誰からも信用されない

日頭は盗みとった法主の地位を守り、自分の野望を実現するために、先師の指南に違背するだけでなく、結果として、大聖人と日興上人に背く大罪を犯している。

まず、世界一千万信徒を擁する創価学会を一方的に破門したことは、一切衆生救済の誓願を立てられた大聖人に真っ向から背き、世界広宣布を妨害する「破和合」の大罪である。

次に、日頭は宗規を変更し、自ら辞めると言うまでは誰も法主を辞めさせることができないようにした。これは遺誠置文に「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」と定めた日興上人に違背する大罪である。

この遺誠置文の解釈として、日頭は次のように話していた。

「貫首が己義を構えたという場合には、皆のほうが用いてはならない。これも私はそういう在り方が、あるいはあるかと思えます。まー、私が南無阿彌陀仏をこれから一緒に唱えようって言ったら皆さんどうする？ 絶対、用いない、そんなことは、皆さん方がね。うん。そりゃそうだ。それじゃー、それで放逐するかどうか。まー、南無阿彌陀仏と私が唱えだしたら放逐するだろうね。絶対に放逐しなきゃいかんよ！ そんなことしたら。ねっ」（平成四年八月二十八日 全国教師講習会）

日顕自身が「貫首が己義を構えた場合は、放逐せよ」と言っている。しかし、それは日顕の本心ではない。今の宗門では法主を批判すれば処分され、誰にも法主を辞めさせることができないからだ。

また、日顕は宗門の歴史さえも軽視している。日顕は、日達法主時代の「大客殿」を破壊し、その跡地に「新客殿」を建設したが、その際に、**日興上人お手植之の「子持ち杉」を根から掘り出させ、巨大な飾り物にしつらえさせてしまった。**

この「子持ち杉」は昭和四十一年三月に、静岡県天然記念物に指定されているが、その後、梢の端の枯れが目立つようになり、日達法主が再三、専門家を招いて、立ち枯れの防止対策を試みた。しかし、昭和四十六年一月、目高より上が伐採されるに至った。

それでも日達法主はこの「子持ち杉」の名を後世に残すため、伐採前の子持ち杉から新しく出てきた枝の穂を採取させ、林木育種場に委託して苗木に育ててもらった。そして、昭和四十八年にその苗木を「子持ち杉」の切り株に挿し木したのである。その挿し木した四、五本の苗木は根付いて高さ五、六メートルまで育っていた。

ところが日顕は、日達法主や多くの人々の苦勞を顧みず、いとも簡単に掘り出してしまったのである。

**これは単に、日興上人から続く歴史をとどめる苦勞を無駄にしたというだけではなく、日興上人を軽んじる日顕の姿は日興門流として恥すべきものである。**

日顕は宗門の過去の功績を破壊するだけでなく、宗門の未来をも破壊してしまった。

いくら大聖人の仏法が偉大であると説いても、信徒の淨財で遊興に溺れ、また信徒の淨財で建てたものを何のためらいもなく破壊する教団を、果たして後世の人々が信用するであろうか。

今の時代、権威的な宗教は民衆に受け容れられない。信徒を家来のように扱い、供養を強要する。このような行為は信徒を見下す慢心があるからできるのだ。やがて、宗門はその慢心でわが身を減ぼすことは間違いない。

### ●未来がない宗門。大坊の荒廃と「法教院」の失敗

宗門は二つの意味で、自分たちの未来を破壊したといえる。まず、一つは、先述したように、信徒の淨財を浪費する宗門は後世の人々から信用されないとこと。もう一つは、未来の宗門を背負う龍象を潰していることである。

**いまだに宗門の暴力体質は変わっていない。本来、生命の尊嚴を説かねばならない僧侶が暴力を振るう。仏法否定の最低な行為であり、絶対に許されるものではない。**

小僧たちは先輩にへつらい、後輩に暴力を振るう。暴力が横行する大坊で育つのは、「畜生界」そのものの、歪んだ人間である。彼らこそ、宗門の被害者である。

かつては、大坊を出て、一般の大学に通い、そこで社会性を学ぶことができた。しかし、今では、大坊の学生は日顕の設立した「法教院」にしかいけない。しかし、宗門において「法教院」の評判はすこぶる悪い。その理由は以下の通りだ。

- ① 「法教院」は単なる私塾であり、文科省に認められていないので、卒業しても学歴にならず、卒業者は社会的には「高卒」となる。
- ② 以前は偏差値の高い高校を目指していた小僧がいたが、「法教院」にしか行けない今では、どの高校に行っても同じであり、勉学の意欲がなくなり、必然的に学力が低下している。
- ③ 一般教養以外の教員は宗門僧侶に限られており、おざりな授業になっている。そのような中で、広く世間に通用する人材は生まれない。
- ④ 大坊の延長であり、閉鎖的な環境であるため、社会性のない人間となる。
- ⑤ 無任所が増えているのに、「法教院」を存続させるために得度者を採らなければならぬ。
- ⑥ 「法教院」を維持するために膨大な費用がかかっており、宗門財政を圧迫している。

日顕は「法教院」を批判されると、常に過剰に反応する。宗会議員の有志が「法教院」に対して意見したが、日顕はすぐに『吾が弟子一同に告ぐ』という文書で反論した。

日顕が恐れていることは「法教院」が消滅することにより、創立した日顕の無能さが歴史に残ることである。

宗内の中で一体、何人が「法教院は必要である」と思っているであろうか。皆無である。誰一人喜ばない、日顕の自己満足。それが「法教院」である。日顕の死後、その日顕の分身ともいえる「法教院」が閉鎖されることは間違いない。

## 十、〈結論〉 日顕の完全敗北

### ●日顕の打っ手はすべて失敗

〃信徒の完全支配〃を実現するため、日顕は創価学会を切り崩す「切り札」を使った。それが、添書登山、葬儀、そして御本尊下付停止であった。

まず、日顕らは「登山」を武器に使って大量の脱会者を取り込もうと考え、「添書登山」を開始する。

「C作戦」どおりに、平成三年六月五日に宗門は、「添書登山」開始の広告を一般紙に掲載し、七月二日から添書登山を実施した。

当時、庶務部長だった早瀬は、「添書登山」開始の前日、大願寺の所化に言った。

「さあ、明日から、沢山の学会員が来るぞ」

しかし、実際には誰も来ない。日顕らの脱会者作りの画策は最初から失敗した。

次に日顕らは十月二十一日に、僧侶を葬儀に呼ばなければ〃地獄に落ちる〃と脅迫まがいの「通告文」を学会に送付した。しかし、学会員は「墮落した坊主など、こちらから願い下げだ」と友人葬を一層の確信を持って推進した。日顕らの打っ手はまたもや失敗した。

そして平成三年十一月二十八日、日顕は前代未聞の世界一千万人信徒組織・創価学会の破門という暴挙を行なう。日顕らはこれで大量の脱会者が出て、宗門に来ると信じていた。ところが、池田名誉会長を中心とした創価学会の団結は微動だにできなかった。

日顕らは、〃破門したのだから、御本尊を授与する必要はない〃と「御本尊下付停止」を決定した。

日顕らは〃いくら学会員が池田名誉会長を尊敬してしようと、御本尊がなければ、信心はできない。これで創価学会はおしまいだ〃と息巻いた。

ところが、日顕らの「最後の切り札」も、大聖人直結の創価学会の信心にはかなわなかった。まるで、ひき目の矢で脅しても不退転を貫いた熱原の農民たちを前にした平左衛門尉頼綱のごとく、日顕は地団駄を踏んだ。



日顕らの敗因は何か？ それは本物の日蓮仏法、師弟の信心が理解できなかったことである。

「いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」(御書一三六〇頁)との御金言の通り、大聖人と同じく、広宣流布の誓願を立て、いかなる難が押し寄せようとも不退転の信心を貫く。その「師弟不二」の信心の前では、「〇作戦」も〇風の前の塵〇でしかなかった。

なぜ、日顕らはそのことが理解できなかったか？

それは今の宗門に「師弟」がないからだ。宗門にも形式的な師弟は存在する。末寺の所化は住職を「お師匠さん」と呼ぶ。宗門の僧侶は法主を師と仰ぎ、絶対服従を強いられる。しかし、そこには「信頼」や「尊敬」はない。なぜなら、師と呼ばれる僧侶たちに透徹した信心がないからだ。

折伏も唱題もしない。昼間はゴルフに精を出し、毎晩、酒場に繰り出す。遊興に溺れる住職たちの姿を見ている所化たちは形式的には「師匠」と呼ぶが、内心では馬鹿にしている。それが宗門の師弟関係の実態である。

宗門の師弟は、制度化された「徒弟制度」と同じである。ただ、職業的に儀式のやり方を学ぶものでしかない。そこには信心は必要ないのだ。

●日寛上人書写の御本尊に対する難癖はすべて崩壊。ニセ本尊でないことを一番、わかっているのは、日顕

「我並びに我が弟子諸難ありとも疑う心なくば自然に仏界にいたるべし、天の加護なき事を疑はざれ現世の安穩ならざる事をなげかざれ」(御書二三四頁) — 不退転の信心を貫けば、必ず道が開き、諸天の加護がある。これが大聖人の教えである。

全学会員の強盛な信心に導かれたがごとく、栃木・浄圓寺が離脱し、平成五年九月七日、同寺の宝物として格護されていた二十六世日寛上人書写の御本尊が、創価学会員に授与されることが発表された。

日顕は、まさか、創価学会が日寛上人書写の御本尊を授与するとは思わなかったに違いない。浄圓寺の離脱を聞いて、日顕が〇しまった。あそこには歴代の本尊がたくさんある〇と言ったという噂もある。

宗門には、昔からその末寺の有縁の法主が書写した本尊を印刷して信徒に授与してきた歴史がある。例えば、品川の妙光寺は、五十五世日布法主の御形木御本尊。池袋の法道院は、五十六世日応法主の御形木御本尊。そして常在寺は、五十七世日正法主の御形木御本尊をそれぞれ授与していた。

だから、創価学会の場合も同じように、二十六世日寛上人の御形木御本尊を会員に授与することを決めたのである。

ところが、宗門は〇授与書きを削ったから〇とか〇法主の許可がないから〇、学会が授与している本尊はニセであると言いつしたが、これは難癖でしかない。

歴代法主書写の本尊から形木を作る際に、授与書きを取ることは昔からやっていたことである。古刹の寺院には歴代法主の形木本尊が数多く存在するが、授与書きが削除されている場合が多い。ただ、信徒はそのことを知らないから、日顕らはそれをいいことに脅しに使ったのだ。

また、宗門も末寺の板本尊の願主の池田名誉会長の名前を削っており、そのことが問題でないことを自分たちで証明した。

創価学会が授与している本尊がニセでないことを一番、わかっているのは日顕である。

結局、日顕らは「法主の許可がない」としか言えない。単なる、負け惜しみである。勝手に破門して「関係ない団体」と言いながら、いざとなると「許可がない」という。まるで駄々をこねる子供のようだ。

そもそも、相承疑惑の日顕に、御本尊に関して発言する資格などない。

### ●日顕書写の本尊は消え、日寛上人書写の御本尊が世界に流布

今や、創価学会の中から、日顕書写の本尊は消え、代わりに日寛上人書写の御本尊が世界百九十カ国・地域に流布されている。これこそ、日顕の完全敗北の象徴である。

宗内の本尊もお取り替えが始まり、徐々に日如書写の本尊に変わっていく。当代の書写した本尊に変える。日顕が登座した時も、そう言っただけで、日達法主書写の本尊を取り替えていった。同じように、日顕書写の本尊は取り替えられ、消え失せていくのだ。

### ●最高裁でも敗北続きの日顕は必ず、除歴されるであろう

日蓮正宗の歴史で、最高裁で裁かれた法主がいただろうか？ しかも一度ならず、七回である。以下、その概要を述べる。

- ① 妙道寺（中島法信住職）明け渡し請求——宗門側の訴えを却下（平成十四年一月二十四日）
- ② 常説寺（山本辰道住職）明け渡し請求——宗門側の訴えを却下（平成十四年一月二十九日）
- ③ 大経寺（渡辺慈濟住職）明け渡し請求——宗門側の訴えを却下（平成十四年二月二十二日）

この三つの裁判は、改革同盟の住職たちが「相承がない日顕には法主管長の資格がない、よって管長が有する住職の任免権もない」と主張し、それに対して日顕側は、相承の証拠を何一つ示せず、敗訴した。

- ④ 改革同盟住職への名誉毀損事件——改革同盟の池田託道住職（滋賀・世雄寺）を〃金で離脱した〃と中傷する日顕の発言が名誉棄損で断罪された。日顕に三十万円の賠償命令（平成十五年七月十五日）
- ⑤ 「シアトル事件」をめぐるデマ事件——創価学会がアメリカ連邦政府のコンピューター・データベースに事件に関する虚偽の情報を埋め込んだなどと宗門が捏造報道をしたことに對し、学会が日蓮正宗と阿部日顕個人を訴えた。日顕本人と日顕宗に対して、連帯で四百万円の賠償命令（平成十五年九月九日）
- ⑥ 遺骨大量不法投棄事件——遺骨を米袋に詰めて不法投棄していた事件で大石寺に対し遺族4人に各五十万円（合計二百万円）と慰謝料支払いを命令（平成十五年十二月十九日）
- ⑦ 「芸者写真」裁判——日顕が東京・赤坂の超高級料亭で芸者たちと遊興にふける写真をめぐって宗門側が訴えた裁判。出廷を恐れた日顕は、己の醜聞をめぐる問題であるにもかかわらず、自分は原告からはずれ、「日蓮正宗」「大石寺」を原告に据えて訴えさせた。これに対し東京高裁は「訴える資格のないものが訴えた裁判」であると明確に判断し、日顕側の請求を棄却。これを最高裁も支持。（平成十六年二月二十四日）

宗門は早瀬日如の代になっても最高裁で敗訴している。

- ⑧ 宗門の機関紙「慧妙」が、長野県在住の学会員の名譽を毀損する事実無根の記事を掲載して訴えられた裁判。裁判所は、「慧妙」の悪質な虚報について、「根拠を確認したり、裏付けを

取るなどの取材活動をしたものとは窺われない」（東京地裁）と指摘。最高裁は日顕宗側の上告を棄却。これにより日蓮正宗と「慧妙」発行に関与している妙観講の指導教師である小川只道（理境坊、大石寺理事）、同講の講師・大草一男（大講師）らが総額百九十万円の損害賠償金支払いを命じられた。（平成二十一年二月二十七日）

完全に社会的信用を失った法主を後世の宗門僧侶たちはどう総括するであろうか。日顕の名が歴代から除籍されることは間違いない。

### ●破門以降、宗門は衰退するばかり

宗門の敗北は誰の目にも明らかだ。日顕のせいで何度も裁判で断罪されて社会的信用を失っただけでなく、創価学会を破門して、宗門の信徒数は激減した。実質、十万人にも満たない。だから、平成二十一年の五十万登山では、一人が複数回の登山を余儀なくされた。十回以上、登山したと証言する者も少なくない。

また、信徒の激減で、宗内の三分の一が援助寺院になっている。地方の寺院では正月の勤行会や御講の参加者が十名に満たないところがある。

また、どこの末寺の法華講も、圧倒的に高齢者が多い。だから、折伏の進まない現状では、信徒は減るばかりである。

このままでは援助寺院は増える一方で、将来的には、末寺を統廃合するしかない。

もう一つ、宗門が抱えている問題は、「無任所教師」の増加である。日顕の自己満足のために設立した「法教院」を存続させるため、宗門では毎年、一定数の得度者を募っている。そのため、無任所教師は増え続け、今や二百五十名近い数になっている。このまま推移すると、まもなく宗内教師の三人に一人が無任所の時代が来る。この無任所教師の増加を食い止めるためには、「法教院」を閉鎖するしかない。宗内の誰もが、日顕の死後、「法教院」は閉鎖されるに違いないと思っている。

### ●破門以降、学会は大発展。三百になろうとしている池田名誉会長への名誉学術称号

坂道を転げるように衰退する宗門とは対照的に、創価学会は破門以降、大発展している。

破門当時、百十五カ国・地域だったSGIの陣容は、今や百九十二カ国・地域へと大拡大し、世界宗教として世界から信頼を得ている。

「破門通告書」が学会本部に届いた平成三年十一月二十九日、アフリカの全駐日大使、二十六カ国からなる「アフリカ外交団」の総意として、池田名誉会長に「教育・文化・人道貢献賞」が授与された。

世界の良識が認める池田名誉会長と創価学会を、宗門は切り捨てたのである。これは自らを世界の良識から切り捨てたことになる。象徴的な出来事だった。

池田名誉会長の活躍を讃える声は後を絶たない。その功績に対して、世界各国から四千を超える特別顕彰、七百にならんとする都市からの名誉市民証、二十二カ国からの国家勲章等を授与されており、さらにまもなく三百になる名誉学術称号を受けている。

その偉大さは贈られた学術称号の数だけではない。授与した大学がアジア・ヨーロッパ・アフリカ・南北アメリカ・オセアニアの五大州すべてにわたり、文化と宗教の壁を超えていることである。しかも、その大学の中に、モスクワ大学、北京大学、ボローニャ大学、グラスゴー大学、インドネシア大学など、各国を代表する名門が並んでいる。民間人が受けた名誉学術称号としては、世界一である。

宗門の檀徒たちは〆金で名誉称号を買っている〆などと根拠のない非難をしているが、これほど、

授与した大学に失礼なことはない。

名誉学術称号の授与決定までには、何段階もの手続きが必要である。対象者の経歴や実績なども徹底して調べられる。例えば、インドネシア大学の場合、審議会のメンバーはイスラム教徒であり、全員一致でなければ授与されることはない。

また、池田名誉会長はハーバード大学をはじめとする各国最高峰の大学・学術機関で三十二回の講演を行なっている。それこそ、単なる肩書きだけで、できることではない。

さらに、世界的な識者や指導者との対談集は五十点を超え、その中にはトインビー博士との『二十一世紀への対話』のように、世界的名著として知られているものもある。

元インドネシア大統領のワヒド氏のように、トインビー対談を読んで感銘を受け、池田名誉会長との会見を望み、実現した識者も少なくない。

「ワシは法主だ」などと数百名の僧侶の中で威張っている日顕など、足下にも及ばない次元の話である。

### ●日顕の怨念から生まれた今の宗門は「日顕宗」

今回の宗門事件を振り返ると、宗門が僧俗平等の大聖人の教えを受け継ぐのか、それとも檀家制度の弊害でもある僧俗差別の道を選ぶのか、その選択を迫られた試金石だったとも言える。

もし、宗門が衣の権威・出家の慢心を打ち破ることができていれば、宗門は、僧俗平等を貫く、真の日蓮門下の僧侶集団として、生まれ変わっていたかもしれない。

しかし、日顕と他の僧侶たちにはそれが出来なかった。それはなぜか。一番の理由は、彼らが大聖人の「民衆のために戦う」という崇高な精神を忘れてしまっていたからである。

大聖人は次のように仰せである。

「一代の肝心は法華経・法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり、不軽菩薩の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」(御書一一七四頁)

日蓮大聖人は、不軽菩薩が増上慢の人々から杖で叩かれたり石を投げられたりしても礼拝行を貫き通したように、あらゆる苦難を受けながら、末法の衆生を救済するために戦った。

そして、大聖人は、教主釈尊の出世の本懐とは、自他の仏性を信じ、その仏性を開いていく「人の振る舞い」であると明確に示されている。

ところが、日顕は仏性を具す世界一千万人信徒を「僧よりも下」と蔑み、切り捨てたのである。大聖人の精神を捨て、日顕の「C作戦」に与同した宗門は、日顕の怨念から生まれた「日顕宗」であり、「C作戦」の首謀者の一人である早瀬日如は「日顕宗二世」ではない。

### ●実行部隊の中心者であったことを告白していた早瀬日如

早瀬日如は「日顕宗二世」にふさわしい者だ。なぜなら、「C作戦」実行部隊の中心者は早瀬日如だったからだ。

宗門事件が始まった当初、宗務院にいた南條信聡は次のように言っていた。

「学会から『お伺い』が来て、山の雰囲気は「これはまずいな」という感じだった。でも、御前さんの勢いがすごかったから、「学会と戦うぞ」という雰囲気変わった」

このように、一度は本山の学会攻撃のトーンは落ちたが、日顕の「池田名誉会長憎し」の感情

が宗内に勢いをつけたのだ。

そしてその中で〃実行部隊〃の中心者として日顕を助けたのが、当時庶務部長だった早瀬日如だった。早瀬は宗門事件の渦中、大願寺の所化を目の前にしてこう言った。

「今回の問題は全部俺がやってきたんだ。総監なんて俺がいないと仕事ができないんだ」

早瀬は弱腰だった総監の藤本を陰でけなし、自分こそが「C作戦」実行の〃立役者〃だと自負していたのだ。

### ●永遠に創価学会に依存する日顕宗

日顕は、〃創価学会がなくても、やっていける〃ということに執着していた。しかし、今の宗門の資金そのものが、かつて創価学会が供養したものである。

もし、日顕が学会を破門した時に、それまでの供養金を学会に返還して、裸一貫から始めたのであれば、筋が通るが、実際には、宗門は、破門した創価学会の供養に支えられている。口では「創価学会は謗法だ」と言いながら、現実には、その創価学会の供養金で宗門は存続しているのだ。

長年の創価学会の外護により、今の宗門があるのは否定しようがない事実である。創価学会の存在がなければ、出家することがなかった者も大勢いる。すなわち、宗門の存在そのものが、厳然と、破門された創価学会に依存しているのである。

そのことを忘れて、いくら日顕らが「僧侶主体だ」と叫んでも、それは「在家を認めたくない」というコンプレックスの裏返しでしかない。提婆達多の人生が怨念を晴らすためのものでしかなかったように、日顕宗は日顕の怨念を晴らすための手段になっている。

宗門が、〃嫉妬と怨念の連鎖〃という日顕のコンプレックスから逃れる方法は一つしかない。それは、彼らが池田名誉会長と創価学会に心から感謝し、悔い改めることである。それができて、初めて、彼らはコンプレックスを乗り越え、自立した信仰の道を歩むことができる。

提婆達多が地獄に堕ちた後に救われたのは、苦しんだあげくに、自分の慢心を悔いて、釈尊の偉大さを受け容れたからである。

### ●もはや日蓮正宗は存在しない

日顕は、大恩ある創価学会を破門し、一切衆生救済の大聖人を否定した。そして、法主絶対の己義で日興上人の遺誡置文を否定し、所化に対する暴力で仏法の精神を否定した。これこそ、「三宝」否定の姿である。

また、創価学会の破門は、世界広宣流布の放棄である。

日蓮大聖人は仰せである。

「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに・還つて日蓮を種の難に合せ結句此の島まで流罪す」(御書一三三七頁)

大聖人は、世界の民衆に、仏になる血脈を継がせるために御本尊を顕された。

しかし、日顕は創価学会を破門して、民衆救済を放棄しただけでなく、御本尊授与を停止して、大聖人の御遺命達成を妨害をした。師敵対の宗門に宗祖の血脈があるはずがない。すなわち、もはや日蓮正宗は存在しないのだ。

●今、宗門がやっていることは、全部、創価学会のサル真似

「C作戦」を実行して二十年。宗門がやっていることは全て創価学会のサル真似でしかない。折伏、唱題、登山会、すべて創価学会が作った伝統である。

創価学会が出現する以前の宗門では、折伏する者はなく、信徒は唱題さえしていなかった。本山の周りの旧信徒はいまだに勤行も唱題もできない。

かつて日顕は青年得度者にこう話した。

「昔は、本山の回りの檀家は謗法だらけだった。それが創価学会のおかげでずいぶん良くなった」

謗法に染まっていた日蓮正宗を再生させたのが創価学会であることを日顕も認めていたのだ。

日顕は創価学会の存在を否定しようとしたが、本山の多くの土地、建物、そして末寺の大半も創価学会の供養である。また、今の宗門を支えている檀徒たちも創価学会の縁で入信した者ばかりだ。

いくら、日顕らが創価学会の存在を否定しても、今の宗門の土台は、創価学会が作りあげたものであり、日顕らが今、行なっていることもすべて創価学会のサル真似でしかない。

●創価学会こそ、世界の民衆を救う「法師」の教団

『法華経法師品第十』に在家・出家の差別を超えた「法師」について述べられている。

「若し善男子・善女人は、法華経の乃至一句に於ても、受持・誦誦し解説・書写し、種種に経卷に華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繒蓋・幢幡・衣服・妓樂を供養し、合掌恭敬せば、是の人は一切世間の応に瞻奉すべき所なり。応に如来の供養を以て、之を供養すべし。当に知るべし、此の人は是れ大菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍し、願って此の間に生まれ、広く妙法華経を演べ分別す」

この『法師品』では、五種の修行（受持・誦・誦・解説・書写）をする者を「法師」と名づけ、在家・出家ともに、法華経受持の者は最高の供養を受けると説かれている。

また、日蓮大聖人は次のように仰せである。

「法華経を受け持ちて南無妙法蓮華経と唱うる即五種の修行を具足するなり」（御書一二四五頁）  
「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は法師の中の大法師なり」（同七三六頁）

すなわち、御本尊を受持する人は、たとえ在家であっても「大法師」なのである。

在家の「法師」が活躍すれば、〃やがて自分たちの立場が危うくなり、供養が入らなくなる〃と慢心の僧侶たちは恐れるのだ。

この「大法師」である学会員を迫害する日顕宗の僧侶と日顕は、「道門増上慢」「僭聖増上慢」である。

また、御書には仏が滅して七百年後に魔が阿羅漢となって出現することが書かれている。

「涅槃経の七の卷に仏迦葉に告げ給わく『我般涅槃して七百歳の後はの魔波旬・暫く当に我が正法を壊乱すべし、乃至化して阿羅漢の身及び仏の色身と作らん魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作りて我が正法を壊らん』云云」（御書六五一頁）

さらに日蓮大聖人は世界広布が始まる時に天魔が出現することを予見されていた。

「法華經の中に仏説かせ給はく我が滅度の後・後の五百歳・二千二百余年過ぎて此の経閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入りかはりて此の経を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば或はのり打ち所をうつし或はころしなどすべし、其の時先さきをしてあらん者は三世十方の仏を供養する功德を得べし」(御書一四一五頁)

三代会長とその弟子たる学会員は、法華經に説かれる通りに、障魔の嵐を乗り越え、世界広布の大道を切り開いてきた。

そして大聖人滅後七百年、その世界広布の大道を破壊しようとして出現したのが天魔・日顕であった。

「たまたま信ずる者をば或はのり打ち所をうつし或はころしなどすべし」とあるように、日顕は「C作戦」を仕掛けて脱会者作りの号令をかけ、創価学会を「破門」にした。

しかし、師弟不二の信心を貫いた池田門下の会員が、自ら宗教改革の先頭に立ち、天魔の野望を打ち砕いたのだ。

そして、「其の時先さきをしてあらん者は三世十方の仏を供養する功德を得べし」と大聖人が断言されているように、創価学会は未曾有の発展をして創立八十周年を迎え、世界中の会員が大功德・大歡喜の人生を送っている。

この全世界の創価学会員の大勝利の姿こそが、日顕の完全敗北の証左である。

私たち青年僧侶改革同盟は、池田名誉会長が初の海外指導に発たれた「世界平和の日」五十周年にあたり、ここに日顕の完全敗北を宣言するとともに、創価学会という大聖人直結の和合僧団の一員として師弟の道を歩むことができることに心から感謝し、これからも身を粉にして、破邪顕正の戦いに邁進していくことを誓願するものである。

平成二十二年十月二日

青年僧侶改革同盟一同